正誤表

146頁の【註】18に誤記が認められますので、以下の通り訂正いたします。

誤	2011年4月から同年6月まで、フジテレビほかにて放送されたテレビアニメ。
正	同上。

［論　説］

岡崎嘉平太とその時代――
日中友好に尽くしたANA（全日空）社長の肖像
=前篇=

OKAZAKI Kaheita and his time ――
A portrait of the business leader who devoted himself to the friendship between Japan and China
=The first part=

山　口　一　輝

序章：岡崎嘉平太　―日中友好に尽くした ANA 社長―

岡崎嘉平太―ANA（全日空）と中国を結びつけた男―

2020 年の東京オリンピックを前に国際化が進む東京国際空港（通称：羽田空港）。2018 年 7 月、羽田空港国内線第 2 旅客ターミナル 3 階の「ディスカバリーミュージアム」にて“岡崎嘉平太展”が開催された。それよりも数年前のことである。

「大きな翼に、大きな夢を」。尖閣諸島の領有問題などをめぐり日中貿易はじめ日中関係が冷え込む 2014 年 3 月 31 日。沖縄発 ANA126 便の“ジャンボジェット”が羽田空港に着陸した。ここに“ジャンボ”の愛称で親しまれてきた ANA（全日本空輸、以下「全日空」と略す箇所もある）のボーイング 747 がラストフライトを終え、惜しまれながら退役した。

ANA（全日空）のジャンボ機と聞いて、ANA の主力機として活躍した“Queen of the Sky（空の女王）”の記憶が呼び起こされる読者は多いだろう。

岡山県名誉県民の称号を受け取った岡崎嘉平太と時子夫人

（（公財）岡山県郷土文化財団所蔵）

だが、もうひとつ忘れてはならない記憶がある。1989 年 6 月 4 日に起きた天安門事件の際に邦人救出のための臨時便の救援機として――日本航空（JAL）のジャンボ機とともに――活躍したことである。天安門事件が起きた 1989 年当時の中国北京（および北京近郊）にはおよそ 4,000 人もの日本人がおり、彼らを日本に帰還させるためには「ジャンボ機 10 機分ほどの臨時便輸送」を必要としていた。そのため、1989 年 6 月 6 日から 6 月 9 日までの短期間ではあったが、中国当局による戒厳令が敷かれるなかで ANA（全日空）と日本航空（JAL）は「北京から東京（羽田）」へのジャンボ機の臨時便を可能な限り設定し、邦人の救援輸送を行った[1]。

そんな ANA（全日空）は、何かといえば“中国”というイメージがあるようだ。そして、どうやらこうした「ANA といえば“中国”」というイメージは単なるイメージではなさそうである。“ANA（全日空）”と“中国”、この 2 つを結びつける手がかりが、本論文で考察する岡崎嘉平太である。

岡崎嘉平太は、戦前は中国上海で華興商業銀行理事や日本大使館事務所

ラストフライトを迎えた ANA のジャンボジェット B747型機

資料提供：ANA

参事官として勤務し、戦後はANA（全日本空輸）や池貝鉄工（現、池貝）、丸善石油（現、コスモ石油）の社長を務め、またANA（全日空）社長時代に墜落事故を経験したり日中LT貿易（日中覚書貿易）に携わったりしたことで知られる人物である。

岡崎嘉平太は、「信はたて糸　愛はよこ糸　織り成せ人の世を美しく」や「相手の身になって考える」という言葉を信条とし、それを実践していた。

そんな岡崎嘉平太の人物像をANA（全日空）11代目社長をつとめた大橋洋治氏は、「（岡崎）先生から学んだことというのは、…金儲けとか、経営哲学の中で利益をどうするとか、そういうことは一切ございませんでした」と前置きしたうえで、つぎのように述べている。

> 岡崎先生は哲学者みたいな方で、生き様、それから大義、そういうことを大切にする方で、結局我々の中に残っているのは、岡崎先生のそういう部分が今残されたのかなと思います。「人の話をよく聞く」ということとか、「相手の立場になってやりなさい」ということを言われたのは、今私が若い人たちに言っている言葉と一緒でございまして、実にそういう言葉が岡崎先生の遺産じゃないかなと思います。
> （大橋洋治「岡崎先生を偲ぶ」『岡崎嘉平太がめざした世界平和への道を考える　第6回講演会』岡崎嘉平太記念会館、平成19年、43-44頁。）

大橋氏が岡崎を「哲学者みたいな方」だと形容するのは、やはり岡崎が「信はたて糸…」や「相手の身になって考える」という言葉を信条とし、それを実践していた人物であったからではなかろうか。

本論文では日中友好に尽くしたANA（全日空）社長として知られる岡崎

嘉平太とその時代について取り上げた。これは、岡崎嘉平太の伝記でもなければ、日中外交史でも ANA の社史でもない。岡崎嘉平太というひとりの人間が、青春時代に抱いた日中友好を実現することを目指し、ANA（全日空）社長時代にそれを世の中にぶつけ、さらに生涯を通じて日中友好に尽くしたこと“だけ”を考察したり検証したりするものでもない。岡崎は生涯を通じて日中友好に尽くした。そのため岡崎は日中友好や中国問題に関する本を書いており、著書に、『中国問題への道』（春秋社、1971 年）、『これからの日中問題』（内外情勢調査会、1972 年）、「外交と道義――「日中正常化」後を考える」（『世界』1973 年 1 月号、96-99 頁）、『終わりなき日中の旅』（原書房、1984 年。）、伊藤武雄と松本重治との共著『われらの生涯のなかの中国』（みすず書房、1983 年。）などがある。岡崎嘉平太は、青春時代に目の当たりにしたアジア人蔑視の思想、日本銀行勤務時代のドイツ・ベルリン支店赴任中に目の当たりにしたナチスの台頭、華興商業銀行や上海日本大使館事務所勤務時代の中国上海での苦労や困難、敗戦直後の食糧難、池貝鉄工再建のさいの組合との交渉、ANA（全日空）の社長時代に起きた 1966 年の 2 つの墜落事故（羽田沖墜落事故、松山沖墜落事故）など、その人生のなかで数々の苦労や困難に直面した。岡崎嘉平太が送ったこうした波乱万丈な人生に関しては、岡崎嘉平太伝刊行会が編集した『岡崎嘉平太伝』（ぎょうせい、1992 年。）や岡崎嘉平太自身が記した『私の記録――飛雪、春の到るを迎う』（東方選書、1979 年）が詳しい。本論文ではこうしたことばかりでなく岡崎嘉平太というひとりの人間が、その波乱万丈な人生を通じて、その中でどのような苦労や困難に直面し、それをどのように克服し、それから何を学び、そしてこうした教訓をどう活かしたのかを多くの人に知ってもらうことを目的としている。

（岡崎嘉平太：日中友好に尽くしたANA（全日空）社長）

「信はたて糸…」という言葉を信条としていた岡崎嘉平太は、ANA（全日空）社長時代、当時国交がなかった日本と中華人民共和国（中国）とをつなぐために尽力した。岡崎は日中関係について「日本と中国というものが、対立・反目して済むことじゃない。いつかは友好親善をやらなきゃいかん。大きな流れですよ。朝6時になれば、東に太陽があると同じような問題なんです[2]」と語る。

岡崎は青春時代に中国からの留学生と深い絆を育み、ANA（全日空）社長時代には日中LT貿易交渉を通じて中華人民共和国政務院総理・国務院総理だった周恩来と深い絆を育んだ。ANA（全日空）社長という一民間人でありながら日中LT貿易締結に深く携わるなど日中国交正常化に大きな役割を果たした。人生において「相手の身になって考える」ことが最大のモラルであるという考えをもっていた岡崎は、中国のことを知るために戦後100回にもおよび中国（中華人民共和国）を訪れた。同時にこうした岡崎の“日中の旅”は「中国問題への道」へと通じる「終わりなき日中の旅」でもあった。岡崎嘉平太亡き今日でもなお「終わりなき日中の旅」は続いている。

日中国交正常化に関しては、井上正也『日中国交正常化の政治史』（名古屋大学出版会、2010年）や服部龍二氏『日中国交正常化』（中公新書、2011年）で明らかなように、田中角栄や大平正芳などの政治家のリーダーシップと多くの官僚たちの挑戦と尽力による面もたしかに大きい。その一方で現実問題として日本と中華人民共和国との間に国交が結ばれていないなか、貿易による経済活性化によって日本と中国とを結びつけることを目指し、民間人だった岡崎らが中心となって民間貿易締結交渉をおこなった日中LT貿易の功績も見逃せない。

（「現在窮乏…」美土路昌一との出会い：一貫した信条に追加された思想）

私たちの多くが岡崎嘉平太を“日中友好に尽くした ANA（全日空）社長”としてイメージしているならば、こうした岡崎嘉平太のイメージは、――同郷の先輩であり、朝日新聞社社長をつとめたことで知られる――ANA の前身会社“日本ヘリコプター輸送株式会社”の創業者、美土路昌一の影響を受けている可能性が高いと考えられる。

事実、岡崎は「美土路の薫陶を受けた」。岡崎が記した『私の記録』の中でも「「現在窮乏、将来有望」という言葉があるが、…人生についても同じことが言えるのではなかろうか」とそれを如実にあらわす記述がみられる（岡崎「後から来る人に」『私の記録』東方書選書、1979 年、239 頁）。

「現在窮乏、将来有望」という言葉は美土路昌一が信条としていた言葉であり、少なくとも伊東信一郎氏が ANA の社長を務めていた当時までは創業者美土路の想いとして ANA の社長室に飾られていた。またこの言葉は、ANA 社史『大空への航跡――ANA50 年の航跡』によると、「どんなに厳しい苦境に遭遇しても決して腐らず、明るい未来を信じて奮闘努力すれば、やがてきっと飛躍的繁栄のときがくる」という美土路による「叱咤激励の教訓」でもあるようだ[3]。美土路に関しては早房長治『現在窮乏、将来有望　全日空を創った男　美土路昌一』（プレジデント社、2009 年）が詳しい。またこの著書は美土路に関して詳しいばかりではなく興民社の設立経緯や ANA の前身会社“日本ヘリコプター輸送株式会社”の設立の経緯、および同時代の航空行政や社会状況などが詳述されており、本論文でも適宜引用した。本論文の主要参考文献のうちのひとつである。

したがって、私たちの知る岡崎嘉平太の多くは、こうした「美土路の薫陶を受けた」うえでの岡崎嘉平太をイメージしている可能性が極めて高いと考えられる。

こうした美土路の影響を受けた岡崎を理解することが重要であることはいうまでもない。だがそれと同時に岡崎を理解するうえでもうひとつ重要なのがその影響を受ける前を知ることである。すなわち、岡崎嘉平太が、

感謝状

岡崎嘉平太殿

貴方は我社創立時役員として創業に参画され爾来三十年我社の発展に非常な貢献をされました我社が今日の成長発展をみるに至りましたのもひとえに我社への深い愛情と献身的なご努力の賜と心より感謝致しております

私共は今後も創立時の新鮮な精神と情熱を失うことなく更に新しい時代にふさわしい体制を整えながら誠心誠意社業に邁進することで全社員の責務であると共に良き先達のご努力に報いることであると確信致しております

創立三十周年を迎えるに当り記念品を贈呈し深く感謝の意を表します

昭和五十七年十二月十五日

全日本空輸株式会社

取締役社長　安西正道

ANA（全日空）からの感謝状（（公財）岡山県郷土文化財団所蔵）

ANA（全日空）のボーイング747“スーパージャンボ”初号機受領式

（（公財）岡山県郷土文化財団所蔵）

どのような生い立ちであり、幼少期から青年期に至るまで、何を経験し、何を学び、成長してきたか、である。美土路と出会う前の岡崎と美土路と出会ってからの岡崎を比較することで岡崎の思想の変化を考察することが期待できる。

（相手の身になって考える――人間の最高で最低のモラル）

「相手の身になって考える」という言葉を信念としていた岡崎は青春時代の岡山中学と第一高等学校時代に中国からの留学生と出会った。岡山中学時代に出会った中国からの留学生陳範九との交友をきっかけに日中問題に関心をいだくようになった。そして一高時代に出会った中国からの留学生龔徳柏から中国上海での英国人による中国人差別の話を聞かされ、「進歩史観」に基づいた“西洋人による東洋人いじめ”と 20 世紀前半までの世界的な白人優位主義思想を実感した。そしてこうしたことから岡崎は「日中友好とアジア人共同意識」の重要性を理解してゆくようになった。青春時代にこのような価値観を形成した岡崎は、日銀ベルリン支店赴任中に人種主義と反ユダヤ主義をかかげたナチスが台頭し多くのドイツ人がそれに熱狂した現状を目の当たりにした。日本銀行勤務時代の岡崎は日本にいたころより伝聞を含め中国に駐屯する日本軍の中国人市民への残虐行為や満州事変や日本軍による中国侵略（進出）の事実を熟知していたため、“ナチスのユダヤ人いじめ”を“日本軍の中国人いじめ”に重ね合わせる。

このように岡崎嘉平太の「相手の身になって考える」という信念は結局のところ“弱い者いじめに反対”する信念であるという仮説を検証することが本稿の 1 章～ 3 章の主題となる（1 章：“西洋人による東洋人いじめ”、2 章：“ナチスのユダヤ人いじめ”、3 章：日本軍の中国人いじめ）。そして、戦後の岡崎における日中問題を考察するさいにもこうした日本が

中国を侵略した事実や、日本軍による中国に対する残虐行為を念頭に置く必要があるのではなかろうか（「反省の念」、「精神的償い」）。

（岡崎嘉平太とその時代：本研究の目的と取り組み）

岡崎嘉平太は日中友好に尽くしたANA（全日空）社長として広く知られているが、そのような岡崎のANA（全日空）社長時代の仕事内容や航空輸送産業への功績に関してはあまり知られていない可能性がある。岡崎がANA（全日空）の社長になるまでの間なにをしてきたのかに関しても、日本経済新聞のコラム『私の履歴書』（岡崎嘉平太「私の履歴書」『私の履歴書――経済人＜第10巻＞』日本経済新聞社、1980年、収録）を読まない限り、あまり知られていない（むしろ、『私の履歴書――経済人＜第10巻＞』ではANA（全日空）社長時代に関してはほとんど記されていない。）可能性すらある。したがって、本論文はこうした岡崎の謎に包まれた“空白部分”を解明することを目的としている。

岡崎嘉平太は、1897年に生まれてから92歳で没するまで、波乱万丈の人生を送っていた。少年時代の小学校1年生のときに火事で自宅を焼失したり、青春時代の中学生・高校生のときに2人の中国からの留学生と出会い日中問題に関心を持ち「日中友好」について考えるようになったり、日本銀行勤務時代は赴任先のドイツ・ベルリンでナチスの台頭を目の当たりにしたり、ドイツから帰国後は日中戦争下の中国上海で華興商業銀行の理事をつとめたり、その後、大東亜省参事官や在上海日本大使館事務所参事官として勤務したり、日本の敗戦に伴い上海日本大使館事務所で敗戦事務処理に奮闘したり、帰国後、池貝鉄工（現、池貝）や丸善石油（現、コスモ石油）の再建に携わったり、郷士の美土路昌一とともに全日空（ANA）の前身会社「日本ヘリコプター輸送」の設立に関わり資金集めに奔走した

り、全日空（ANA）社長時代は日中 LT 貿易交渉に尽力するなか 1966 年には 2 つの航空機墜落事故（羽田沖事故と松山沖事故）を経験したり、その後、岡崎にとって念願だった日中国交回復と全日空（ANA）の中国線開設（1987 年 4 月 16 日）を達成したり、1989 年 5 月に戦後 100 回目の訪中を達成したりするなど、まさに波乱万丈の生涯であった。

こうした人生を送った岡崎嘉平太と岡崎が生きた時代について、本論では 6 章構成とし、第 1 章では岡崎の青春時代を中心に誕生から大学を卒業するまでの時代を扱い、第 2 章ではドイツ・ベルリン支店勤務時代とナチスの台頭を中心に日本銀行勤務時代を扱い、第 3 章では華興商業銀行勤務時代と上海日本大使館事務所勤務時代を中心に中国上海勤務時代を扱い、4 章では池貝鉄工と丸善石油の再建の話を中心に連合国占領下の日本と岡崎の公職追放時代を扱い、5 章では、美土路昌一らとともに ANA（全日空）の前身会社を設立した話や日中 LT 貿易に携わった ANA（全日空）社長時代の話を中心に ANA（全日空）社長・副社長時代を扱い、6 章では「岡崎嘉平太と中国」をテーマに岡崎の日中 LT 貿易締結交渉の功績を中心に扱う。ただし、本寄稿で扱うのはこのうちの 3 章までであり、4 章以降は次回扱うこととする。

第 1 章：青年期までの岡崎嘉平太

岡崎嘉平太は「信はたて糸　愛はよこ糸　織り成せ人の世を美しく」や「相手の身になって考える―人間の最高で最低のモラル―」という言葉を信条としていた。そんな岡崎嘉平太は、いったいどんなものであったのだろうか。その人間性を知る手がかりが『岡崎嘉平太記念館だより』に記されていた。「岡崎嘉平太さんは、ものを大事にし、自分の身のまわりのこ

とは自分でしていたそうです。お菓子などの包み紙も、また後で使えるようにたたんで、箱にしまっていました。(『岡崎嘉平太記念館だより＜ VOL.1 ＞』2004 年 7 月、3 頁)」。何となく「信はたて糸…」や「相手の身になって考える…」という言葉とつながるものが見えてくるかも知れない。

本章ではこうした岡崎嘉平太の人格が形成される幼少期から大学卒業までを青春時代を中心に考察したい。

1．岡山生まれの幼少時代

岡山といえば桃の産地として知られているが、桃太郎伝説もここ岡山の“吉備の田舎”が発祥の地だという説がある。そして、岡崎が生まれた現在の吉備中央町をはじめとした吉備には桃太郎発祥説のもとになった温羅に関係する伝承が多く残っているようである[4]。

1988 年に開港した岡山空港（岡山県岡山市北区）から車で走ることおよそ 30 分、吉備中央町の“きびプラザ”内にある岡崎嘉平太記念館を通

岡崎嘉平太生家跡・岡崎家墓所付近
（2013年7月7日、岡山県吉備中央町、著者撮影。協力：安田英祥氏）

過する。そしてそこから車で走ることおよそ 5 分、岡崎嘉平太の菩提寺“妙本寺”を通過する。そしてさらにそこから数十分ほど歩くと岡崎家墓所と岡崎嘉平太生家跡に辿り着く。岡崎嘉平太の物語はここ岡山県吉備中央町からかじまる。

明治 30（1897）年 4 月 16 日、まだ桃太郎伝説が残る岡山県吉備郡の大和村（現、吉備中央町）で、岡崎鶴太郎と岡崎のぶとの間に長男が生まれた。この長男こそが、岡崎嘉平太である。

岡崎嘉平太生家近くは、妙仙寺、妙音寺があり少し離れたところには大和神社があるなど、神社仏閣があちこちにあった。ちなみにこの生家近くの妙本寺が先述した岡崎嘉平太の菩提寺である。

岡崎は、7 歳のとき（1904 年）に大和尋常高等小学校に入学する。そんな小学校に入学して間もない岡崎に突然の不幸がおとずれた。この年の暮れに火事で自宅が焼失したのである。翌年この昨年の自宅焼失のため岡崎は吉備群総社町（現、岡山県総社市）に転居することとなった。またそれに伴い岡崎は申義尋常小学校へ転校することとなった。そして岡崎は小学校時代の多くをこの申義尋常小学校と総社で過ごし、その後、13 歳のとき（1910 年）に総社尋常小学校高等科に入学した。

岡崎嘉平太が学んだ大和尋常高等小学校（（公財）岡山県郷土文化財団所蔵）

岡崎にとって小学校時代の思い出に残っている先生のひとりが尋常小学校5年生のときに英語を教えてくれた下妻鉄太郎であった。岡崎は恩師の下妻に関して「非常に親切な先生でして、亡くなられるまで手紙を出したりお目に掛かったり、交際を続け…後に全日空が出来て、岡山に飛行機を飛ばすようになったとき、試乗の日に…ご一緒に乗って15分くらい飛びましたが、えらい喜ばれましたよ。それが下妻先生への最後のご奉公でした（『岡崎嘉平太伝』、21頁）」と述懐している。

２．岡山中学校時代―中国からの留学生陳範九との出会い―

明治44（1911）年、岡崎嘉平太が14歳のときに、4番の成績[5]で、岡山県立岡山中学校（現、岡山県立岡山朝日高等学校）に入学した。岡山中学時代の岡崎は、歴史の勉強をはじめ学業面で優秀な成績を修めたりテニスを頑張ったりするなど、文武両道に励んだ。そんな岡崎は岡山中学の寄宿舎で中国からの留学生陳範九と出会った。そして岡山中学の寄宿舎での陳との出会いはのちに岡崎を「中国に引き付けた原動力」となった。

岡崎は、岡山中学校時代は「勉強が出来た」と自負をする。だが岡崎は、その理由は、「中学時代はそれほど勉強したわけじゃないですけどね、学校の先生が皆良かったですよ[6]」と、「先生がよかったからだ」と謙遜する。また岡崎は、「母親に対する恩返しの意味でも多少は勉強しました[7]」と、岡崎の成績のことを随分と考えてくれていた母のぶへの感謝も口にしている。

岡山中学校時代の岡崎は歴史の勉強が好きだったようである。そんな歴史好きの岡崎は、岡山中学校の寄宿舎で、中国からの留学生陳範九と出会う[8]。

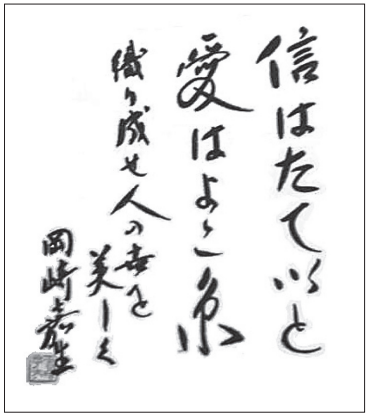
岡崎は、中国からの留学生陳範九との出会いを、「（岡山中学校の）寄宿

舎では…私の同級生が居るから遊びに行ってましたが、そこの室長が陳範九…という 2 年先輩の中国人留学生だったんです。外国の留学生を室長なんかにするところが岡山のいいところだったんです[9]」「（陳は）岡山の医学専門学校に入るために中学校で日本語を勉強していたんです。非常にいい人でね。自分が暇だと中国の話をしてくれるんです。彼はまた字が上手いんです[10]」「（陳は、）中国は外国から苛められているという、祖国の状態のことを進んで話してくれました[11]」と、振り返る。そしてこの陳との出会いはのちに岡崎を「中国に引き付けた原動力」となった。

岡崎は、昭和 59（1984）年 11 月 20 日、岡崎の母校、岡山県立岡山朝日高等学校（旧、岡山中学校）の創立 110 周年記念講演で、「私の生涯の道を決定した先輩・友人」と題した講演をおこなった。

岡崎はこの講演のなかで中国からの留学生陳範九について、つぎのように語っている。

> 私は明治 44 年に岡山中学――お城の中でやっていた学校なんですの寄宿舎に入りました。…私の部屋と廊下をへだてた向こう側の部屋の室長が中国の留学生だったのです。…そこに…遊びに行くと、だんだん室長の留学生と話をするようになりました。なかなか立派な人なんですね。無論、年齢も日本人の同級よりは上だったでしょう。体が大きくてふとっていて大変にこやかな留学生だった。字がうまいので、紙や筆を買い硯で墨をすって字を盛んに書いて貰ったものです。陳範九という名前で、号を洪声という。人懐こく好い人たったもんでたびたび遊びに行って中国の話を聞く。そんなことで親しくなったんですが、これが私を中国に引き付けた原動力であります（『岡崎嘉平太講演集 1』58 頁）。



上：岡崎嘉平太「信はたて糸…」
（（公財）岡山県郷土文化財団所蔵）

左：復元された三笠（神奈川県横須賀市）
（協力：栗原麗羅氏、撮影：2013年）

岡崎は精義塾の先輩である藤井較一海軍大将より日露戦争における連合艦隊と戦艦三笠の活躍を聞かされた。岡崎は1958年に三笠保存会の理事長に就任している。

…彼が書いてくれたものは私の家にまだ残っております（同 70 頁）。

3．第一高等学校時代―中国からの留学生龔徳柏との出会い―

大正 5（1916）年、岡崎嘉平太が 19 歳のときに第一高等学校第一部丙類（独法科）に入学した。東京の一高に通うために岡山から上京してきた岡崎は都内にある一高の寄宿舎に入った。岡崎は寄宿舎について「寄宿舎に入ってみると、同じ独法の部屋が 3 つぐらいあるんですよ。同じ部屋で違った地方から出てきたのと寝ながら話すようなことがあって、あるときには留学生も僕らの部屋へ泊めたこともあった。そこでも友達を作ることを大分心掛けたんです[12]」と語っている。岡崎が一校に入学した翌年、岡崎の父、鶴太郎が米国にて他界した。また岡崎は中国からの留学生龔徳柏

と出会い、龔徳柏から当時の上海の租界での西洋人によるアジア人差別の話を聴き、岡崎は龔徳柏から聴いた中国租界での西洋人によるアジア人差別の話をきっかけに「そのとき初めて日中友好論を考えた」。

一高に入学した岡崎はボート部と弁論部に入部した。弁論部では岡山出身で後に総理大臣となる犬養毅からも指導を受けたことがあるという（犬養毅（木堂）に関しては2章 §3参照）。岡崎は、「犬養さんは、「演説するときには、話を初めのうちは低い声でやれ、すると皆が聞き耳を立てるようになる。それから大きい声で話をするのが秘訣だ」と言っていた」と、犬養より弁論術を教えてもらったことを述懐している（『岡崎嘉平太伝』62頁）。

岡崎は一高時代、中国からの留学生、龔徳柏と出会った。岡崎は龔徳柏の第一印象について「東京の一高でも私のクラスに一人頑丈な、…年も上だと思われる、きつい顔をした龔徳柏という中国からの留学生がおりました」と振り返っている。

岡崎は1984年11月20日、母校の創立110周年記念講演で、「私の生涯の道を決定した先輩・友人」と題した講演をおこなった。この講演のなかで岡崎は、岡山中学校時代に出会った中国からの留学生陳範九の他に（詳細は「中国からの留学生陳範九との出会い」を参照）、一高時代に出会った中国からの留学生龔徳柏についてつぎのように語っている。

> 大正5年といいますと、…中国としては日本に対して異常な不愉快或いは敵愾心をもっておる時でありました。私のクラスの龔徳柏君は当時東京にいた留学生の抗日派グループのボスだったということが、彼が帰ってからわかりました。当時はそういう空気なもんですから、日本人の学生はあんまり留学生と話をしないんです。私は、中学校の

寄宿舎で尊敬する中国人と話し合っていたもんですから、…淋しそうにしておる龔君に話しかけるようになった。…そのようにして中国の状況を聞いていると、…日本…はいわゆる治外法権をもっていて中国のなかでどんな犯罪をおかしても中国の官憲にはつかまんないんですよ。…日本もそのいじめる方の 1 人だったわけです。そんな話をしてくれるもんですからだんだん同情しておりました。

（『岡崎嘉平太講演集 1』70-71 頁）

また岡崎はこの講演のなかで、龔徳柏が、岡崎に語った「犬とシナ人入るべからず」という制札のエピソードを紹介している。

岡崎曰く、ある時、そんな龔徳柏が、岡崎に「上海のイギリスの租界の公園――上海の川に面したところにある小さな公園の入り口に、「犬とシナ人入るべからず」という制札が立っておるんだ」と、話してくれた[13]。龔徳柏からこの話を聞いて、岡崎は、「この中国人を馬鹿にした制札は、単に中国人だけに向けられた侮辱じゃない。東洋人全部、日本人にも向けられた侮辱だ」と感じたという。そして岡崎は「こんな侮辱を許しておいてなるものか。いつの日かこの制札を廃止させなきゃいかんということを強く感じた」。そして「そんなことから、アジアをもういっぺん見直ししてみるようになりました」と、この講演のなかで、回顧する[14]。また岡崎は、この話について、つぎのようにも語っている。

僕は、「犬を連れたシナ人入るべからず」ならまだ分かるけど、犬とシナ人を同格に置くとは何だと、これは日本人を含むアジア人を馬鹿にしている感じがしました。そういうアジア人を馬鹿にする国の人間はアジアから追っ払わなきゃいけないなあとさえ考えました。それ

が日中問題に興味を持った始まりなんです。いつかこういうアジア人蔑視の思想を撤廃させなければいけない、同時に日本は中国との仲を悪くしていたら、日本人自身が困る時が来るぞと思いました。

（『岡崎嘉平太伝』ぎょうせい、1992 年、58-59 頁）

このように当時高校生だった岡崎は、高校生ながらにこうした制札を立てた西洋人による「アジア蔑視の思想」に怒りを覚えたようである。それと同時に龔徳柏から聴いたこの話は岡崎が「日中問題に興味を持った始まり」であり、「そのとき初めて日中友好論を考えた」。龔徳柏から聴いたこの制札の話を契機に、岡崎は人種主義や進歩史観に基づく 20 世紀前半の西洋人による東洋人蔑視の現実を知ると同時に、こうした人種主義や進歩史観に基づいた差別思想の不公正さと不正義さを感じるようになってゆく。「人間に上下はない」「相手の身になって考える」といった岡崎の信条は、こうした人種主義や進歩史観を反面教師にしているのかもしれない。

岡崎はこのように龔徳柏と仲良くなっていった。そのようななか大正 6 年の暮れ、龔徳柏が岡崎に、「岡崎、私はもう中国に帰る」「こんな嫌な日本だと知っていたら来るんじゃあなかった。私は貧乏だったから中国から近い日本に来たんだけれど、もう 1 日も居たくない」と言い、「それでさよならして別れた」ようである（『岡崎嘉平太伝』59 頁）。のちに岡崎はそのときの心境をつぎのように振り返っている。

龔君は…日本に対して強い反抗心を抱いていたから、日本学生とはあまりつき合わない。…ところが私は中学生のとき、…中国人学生が好きになっていたものだから平気で、進んで彼に接近し、話しかけた。

大正 6 年（1917 年）の終わり頃だったか、龔君が私を校庭の片隅

に呼び出し、「僕は国へ帰る。黙って帰ろうと思ったが、君は僕と親しくしてくれたので、君だけには話しておく」という。「そんなことを言わないで勉強だけは済まして帰ったら……」と引きとめようとすると、「こんな日本では勉強したくない。僕は金があったら日本なんかに来るんじゃなかった……」と憤慨して去って行った。

（岡崎嘉平太『私の記録』東方書店、1979 年、11-12 頁）

（龔徳柏と別れた）そのときは私もちょっと寂しかったですね。彼は私以外殆ど話しかける者はいなかったんですからね。2 人は大変仲良くなっていたんです。（『岡崎嘉平太伝』、59 頁）

このように「日本を怨んで」中国に帰った「反日的人物」龔徳柏は、のちに敗戦後、蒋介石の“以徳報怨”演説の原案を書いた人物だとして噂され、こうした「予想外の出来事」に岡崎は驚かされることとなった（3 章§3 参照）。

一高時代の岡崎はこのように、「あまり勉強せんでもいいなと思って」「ボート部でボートを漕いでいた」り、犬養毅から弁論術を指導してもらったり、中国からの留学生龔徳柏と親交を築いたりするような高校生活を送っていた。そんな岡崎は、22 歳のときに東京帝国大学法学部政治学科に無試験で合格し、同年進学することとなった。岡崎はこうした一高時代の生活を「高等学校のときっていうのは、人生を考えるときだっていうふうに考えて、…哲学に深く凝るほど勉強はしなかったですけど、それがやっぱり良かったですね。…我々は人生の中でも幸せな 2 ～ 3 年を過ごしたと思っている。…何でも一緒にやったので、心からの親友が出来たのがいいと思う」（『岡崎嘉平太伝』、68 頁）と振り返っている。

４．東京帝国大学時代

一高を卒業した岡崎は東京帝国大学法学部政治学科[15]に進学した。今日では桜が咲く 3 月に卒業式を迎え、4 月に入学式を迎えるという学年歴が一般的だが、岡崎の時代はこうした今日の様相と異なり、7 月に卒業し、9 月に入学するのが一般的であった。岡崎は 1919 年 7 月 1 日に一高を卒業し、同年 9 月 11 日に東大に入学した。したがって、この年の 5 月 4 日に北京で発生した中国の学生による山東省の利権返還要求運動（五・四運動）や 6 月 28 日のベルサイユ条約調印式などは岡崎がまだ東大に入学する前に起きた出来事である。

東大時代の岡崎は、政治学関係の勉強のなかでも特に経済関係の授業に関心があったが、法律関係の授業にはあまり関心はなかったようである。また 3 年間は精義塾に入寮し、そこで学友との人脈を築いた。さらに先輩訪問を通じて東京にいる岡山県出身の偉くなった有名人のもとを訪ねたこともあった。それから岡崎は就職活動をすることとなり、将来を選択する岐路にあった。以下、こうした岡崎の大学生活を考察したい。

岡崎は、一高時代に「京都大学に行き、河上肇先生の下で経済を勉強しようと思っていた[16]」こともあり、「そういう先生が来て講義をするときは、割合熱心に聞いておりましたけれども、法律はあまり勉強しなかった[17]」ようである。だが岡崎は「憲法をやっているときには」貴族院議員の選任方法には疑問を抱いていたなど、政治には関心があったようである。すなわち、「公爵や侯爵の跡を継ぎ、つまり当主は自然に貴族議員になれる」か「その他にも、…直接税を多く納めている者の中から選ばれる」ような貴族院議員の選任方法が「なんか階級制度みたいなものがあるから…もっと民意が伝わるように貴族院を改造しなきゃいかん」と考えていたようである[18]。

【4-1：精義塾】

22 歳の時（1919 年）に東京帝国大学法学部政治学科に入学した岡崎は、大学時代の 3 年間「精義塾[19]」に入寮した。なお精義塾は「岡山県出身もしくは岡山県に縁故のある学生のための寮」として 1893 年に設立された学生寮である。当時の精義塾では東京にいる岡山県に所縁のある先輩を訪ねたりしていた。いわば社会勉強の場や出会いの場でもあった。

岡崎はのちに 1942 年 12 月より精義塾の監事をつとめている。

【4-2：岡崎の就職活動】

岡崎は東大を卒業する前年から就職活動をはじめていたが「金儲けという仕事があまり好きではない」性格だった。そのためボート部の先輩だった徳永豊に「「（岡崎が）三菱商事に行けば受かるように頼んでおく」と言われた」が、岡崎は「金儲けが好きでないので、「商事会社は嫌だ」と言ったことがある」という（『岡崎嘉平太伝』98 頁）。

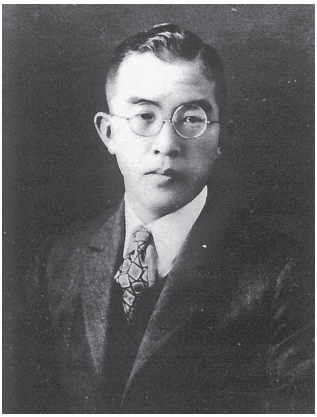
就職活動に困っているなか、岡崎は、ボート部の先輩、濱口雄彦と下岡忠一が日本銀行に行っていたことを知る。ちなみに、濱口雄彦の父は後に総理大臣になった濱口雄幸である。また下岡忠一の父は「当時、憲政会の筆頭総務をやった」下岡忠治である。岡崎は、このような経緯から、「それまで日本銀行なんてよく知らなかったですが、先輩が行っている日本銀行とはどういう所か一度聞いてみようと思って、日本銀行へ行って濱口さんに会ったんです。そうすると濱口さんは、「おい岡崎、来いよ来いよ、ここは何もしなくても月給をくれるぞ」というもんだから、これはいい所だぞと思って、それで日本銀行へ行く決心をしました」と、決めたのであった（『岡崎嘉平太伝』98-99 頁）。

岡崎はこのような縁から日本銀行に入社した。日本銀行入社後の岡崎

は、本店・小樽支店に勤務したのち、1930 年代前半のナチスが勢力を伸ばしていくドイツを観ながらベルリン支店に赴任することとなった。ドイツから帰国後、岡崎は日銀を依願退職し、華興商業銀行の理事として中国上海に渡ることとなる。こうしたなか岡崎がナチス・ドイツ（アドルフ・ヒットラー『マインカンプ（わが闘争）』）の人種差別主義や日本の“中国いじめ”を批判的に観る眼を持つことができたのは、本章で観てきたように青春期に 2 人の中国からの留学生（岡山中学校時代に陳範九、第一高等学校時代に龔徳柏）と出会い、こうした出会いを通じて青春時代に岡崎の「中国観」の基礎部分が形成されたと同時に“中国人から観た日本人観”や“日本と中国が――あるいはアジア全体が――共通して抱える西洋の進歩史観に基づいた東洋蔑視の現実”も学んだからではなかろうか。

第２章：日本銀行勤務時代

東京帝国大学を卒業した岡崎嘉平太は日本銀行で働く道を選んだ。岡崎は日本銀行勤務時代、東京の本店で働いていたばかりではなく、北海道小樽支店に赴任したりドイツ・ベルリン支店に赴任したりするなどの経験をした。そんな岡崎の日本銀行勤務時代のうち、小樽支店勤務時代とベルリン支店勤務時代を中心に以下の 2 つの観点から考察したい。



日本銀行勤務時代の岡崎嘉平太
（（公財）岡山県郷土文化財団所蔵）

ひとつめは“学ぶとはどういうことか”についてである。岡崎にとって日本銀行勤

岡崎がドイツから持ち帰った品々（（公財）岡山県郷土文化財団所蔵）

務時代は学びの場であった。学びには様々なスタイルがあるが、岡崎は日本銀行勤務時代にどのような学びをしてきたのだろうか。本章ではこうした“学び”をテーマにして考察したい。もうひとつは1章から3章まで連続するテーマである“日本の中国いじめ”に根源が類似しているドイツのナチズムについてである。岡崎がベルリンに赴任していたころのドイツはナチスが台頭してきた時代でもあった。青春時代に中国からの留学生との交友を通じて世界が“愚かな人種主義”の思想に支配されていることを理解していた岡崎は、こうしたナチスの台頭を見て、大日本帝国の皇民思想に基づいた日本の“中国いじめ”と『マインカンプ（わが闘争）』にあるようなアーリア人種の優位主義に基づいたドイツのユダヤ人いじめの愚かさとを重ね合わせ、人種主義に基づいた排外主義の愚かさを改めた痛感したのではなかろうか。本章では“ナチズム”について岡崎による『マインカンプ』の解釈などを取り上げ考察したい。

1．日本銀行への就職と小樽支店への配属

岡崎は、大正11（1922）年、25歳の時に東京帝国大学を卒業し、同年4月、日本銀行に入った。日本銀行に入って間もなく岡崎は「一番初めに計算局に[20]」入れられた。岡崎によると、日本銀行の計算局は「数字を上手

に書けなくてはいけない[21]」ところであることに加えて「算盤もしなきゃあならない[22]」ところだったという。

岡崎が就職した当時の日銀と 1942 年以降の日銀とでは日銀の影響力が決定的に違っていた。すなわち私たちの多くが知るような日銀は 1942 年に国や政府による統制権限が強められて以降、法的に旧大蔵省の支配を受けている日本銀行であり、岡崎がいたころの日銀はまだこうした支配が弱かった時代である。現在の日銀が法的に財務省の支配を受けるようになった背景を、川北隆雄は、「現行の日銀法が、大蔵省と日銀との関係において、大蔵省に圧倒的に強い影響力を与えているのは、それが 1942 年という戦時中に作られた法律だからである。戦時経済を効率的に進めるために、国家・政府の統制権限を強めたのだ。日銀はもともと、「官立的・官治的性格」が強かったうえ、この戦時立法がナチス・ドイツのライヒスバンク法の影響を受けていたため、さらに統制色が強まった」と解説している（川北『日本銀行』岩波新書、1995 年、66 頁）。

日本銀行の計算局に配属されてから「1 年の間もたたない」あるとき、岡崎は日銀副総裁の木村征四郎によばれた。木村は岡崎の「郷里の先輩」であった。岡崎が木村のところに「行ったら、「大学出は入って 1 年程たったら、みんな地方に勉強に出すのだが、もし希望があれば君の希望を入れてやる」と言われて、私は南に生まれたから北へやって下さいと言ったら、当時一番北が小樽だった[23]」という。そして岡崎が日銀に入った翌年、大正 12 年の 3 月、岡崎は小樽に行き、その 3 年後（大正 15 年）に本店勤務に戻るまで、日銀小樽支店に勤務した。

岡崎が赴任した当時の小樽は、鰊（にしん）漁をはじめとした地域産業がある全国有数の地方都市のひとつとして栄えていた。たとえば古厩忠夫『裏日本――近代日本を問いなおす』（岩波新書、1997 年。なお、原典は

『明治大正国勢要覧』とのこと。）によると、1920年の小樽の人口は108,113人であり（全国13位）、同時期の札幌の人口は102,580人（全国15位）であることから、小樽は札幌よりも人口が多かった時代もあった。そして何よりも当時の小樽には鰊漁という地域産業や樺太との貿易が小樽経由であったことなどがあり、港町としても栄えていた。岡崎は「小樽は漁業も盛んでした。…我々が居るときは、小樽が鰊漁の最盛期だったです。…そしてあの当時は、樺太との貿易は皆小樽を経由するんですから、港としても非常に栄えていました。鰊漁が最盛のときには小樽は本当に沸いていましたよ。一晩に当時何万円という金が入るんですから…料理屋なんかは本当に繁盛していました（『岡崎嘉平太伝』103-105頁）」と当時の鰊漁最盛期だった小樽について語っている。

こうした時期に日銀小樽支店に勤務していた岡崎は、この小樽支店で銀行の一通りの仕事を経験してきたようである。岡崎は、小樽支店での自身の仕事ぶりを「小樽にやって貰って非常に良かったですね。…小樽に居る間に銀行の仕事を一通り覚えて来いということですから、…時間が余ると他へ手伝いに行くんです。…非常にいい経験になったですね」（『岡崎嘉平太伝』、101-102頁）と振り返る。

岡崎にとって小樽支店での経験は、岡崎が「非常にいい経験」だったと述懐するように、鰊漁の最盛期の小樽の街をみながら、銀行員としての仕事を覚えたよい学びの場であった。だが岡崎が勤めた日銀小樽支店も、戦後になると鰊漁の衰退とともに小樽経済の縮小と人口減少が進み「昭和初期から中ごろまで110人前後の職員がいたが小樽経済衰退とともに減り」はじめて、閉店が決まったころでは23人にまで減少。2002年9月13日その歴史に幕を下ろすこととなった。小樽支店閉店翌日の朝日新聞は、かつて岡崎が日銀の一般行員として小樽支店に勤めていたことと日銀小樽支店

閉店の様子をつぎのように報じている。

「日銀小樽支店、109 年の歴史に幕　創業以来初の支店廃止／北海道」

日本銀行小樽支店が 13 日、最後の営業を終え、109 年の歴史の幕を閉じた。廃止は 16 日付。…建物は来春、日銀の役割などを紹介する金融資料館として再出発する。…営業終了にあたり、藤原作弥副総裁が…談話を読み上げた。午後 3 時、79 年 4 月まで使われた拍子木が打ち鳴らされ、玄関の扉が閉じられ、シャッターが降ろされた。

…日中国交正常化に尽くした元全日空社長故岡崎嘉平太氏も 23 年ごろ、一般職員として勤務。昭和初期から中ごろまで 110 人前後の職員がいたが小樽経済衰退とともに減り現在は 23 人。

（2002 年 9 月 14 日付　朝日新聞朝刊　北海道 2 面　24 頁）

岡崎は小樽に勤務してからおよそ 3 年後の大正 15（1926）年 6 月、日銀

日本銀行小樽支店外観（資料提供：日本銀行）

本店勤務に戻ることとなった。昭和 3 年、31 歳の時に時子夫人と結婚した。翌年、日銀ロンドン代理店監督役附としてドイツに駐在することとなった[24]。岡崎が単身赴任でドイツに駐在していた丁度そのころ、満州事変（1931 年 9 月 18 日）や第一次上海事変（1932 年 1 月 28 日）が起こった。

岡崎はそんななか赴任先のドイツ・ベルリンでナチスの台頭とナチス・ドイツ時代に突入するドイツの歴史を目の当たりにすることとなった。

２．ベルリン勤務時代とナチスの台頭

岡崎がドイツに駐在していた時代は、ドイツではちょうどナチスが台頭してきた時代でもあった。そのため岡崎は、アドルフ・ヒットラーによって書かれた『マインカンプ』をドイツ語の原文で読むなど、ナチスの勉強はよくしていた。しかし、岡崎は、ドイツでは「新聞記者がするような勉強」はほとんどしなかったようである。これはドイツ駐在中に岡崎が“体験学問”による“学び”のスタイルを重視してきたからに他ならない。

学問はしばしば、“目学問”と“耳学問”の二元論で論じられがちである。“目学問”が書物や資料あるいは参考書などから学ぶことであるなら、“耳学問”は先生や専門家などの授業や講義などから学ぶことである。学校制度のような多くの試験を突破するために必要な知識や教養を身に付けるような「勉強」をすることを“学び”と称するような“学び”の場においては、こうした“目学問”と“耳学問”の二元論で構成されるような、「知識や情報を受け身で「受け取る」という「学び」のスタイルである」、“伝聞学問”だけを論じていれば十分かもわからない。しかし、多くの人間にとって“学び”とは、このような“伝聞学問”による“学び”だけとは限らない。“伝聞学問”による知育偏重の“学び”だけが“学び”のスタイルではない[25]。そして、異なる“学び”のスタイルの一つが、体験や経験をと

おして身に付くような“学問”であると考えられる。これを“体験学問”と呼ぶなら、ドイツ駐在時代の岡崎はどちらかといえばこうした“体験学問”による“学び”を重視し、実践してきたのではなかろうか。

ベルリン駐在時代の岡崎は、駐ドイツ大使だった小幡酉吉、ドイツ駐在の陸軍武官だった坂西一良、ライヒスバンク（ドイツ帝国銀行）[26]の総裁だったヒャルマル・シャハト（Hjalmar Schacht）、シャハトの紹介で知り合い友達となったライヒスバンク行員チールシュをはじめ多くの日本人やドイツ人に出会った。それから岡崎はチールシュをはじめ多くのドイツ人とよく交際し、こうした“体験学問”ともいえるようなドイツ人との交流による“学び”をとおして、ドイツ人の“ものの考え方”を学んだ。その一方で先述したように、「新聞記者がするような勉強」はほとんどしなかった。岡崎がこのようにドイツ赴任中にドイツ人とよく交流してドイツ人の“ものの考え方”を「勉強」することができたのは、岡崎曰く、ドイツに行く前に日銀理事で大阪支店長だった中根貞彦に「ドイツに行っても新聞記者がするような勉強をする必要はない」と言われた教えを忠実に守ったためだったという。より正確に言えば「おきまりの金融、経済の報告なんかに時間を費やす」のではなく、「つまらない報告を書く時間をドイツの研究に当てる」ようにという中根の教えを守った。つまり岡崎に“体験学問”の重要性を説いたのは中根だったのである。

岡崎は、中根の訓辞をドイツで実践した体験を、つぎのように振り返る。

> …本店から…至急、ドイツの為替管理の行政機構を調査して報告せよ、という電報が飛び込んだ。…思い余ってチールシュ君に相談を持ちかけた。…2、3 日後にチールシュ君がニコニコ顔で、やってきてうまくいった。…おかげで 1 週間ばかりで極めて詳細な報告書を入手する

ことができ、私はその翻訳だけで任務を果たすことができたのである。

これも中野さんの教えの結果であるが、中根さんの全体を見、基本に取り組めという教えは、私の物の見方に根本的な変化を与え、世界的事件に対する私の推理ないし判断をしばしば正鵠を射たものにした。

（岡崎『私の記録』128-131 頁。）

岡崎が中根の教えを実践した話がもう 1 つある。岡崎がベルリンに赴任していた頃、ドイツでは硬式テニスが流行していた。そのためベルリンの日本人クラブの間でもテニスが流行していた。岡崎は岡山中学のときにテニスをやりすぎて学校の成績が下がり母の意に沿って選手になることを諦めるまでずっとテニスをやってきた経験もあり、ベルリンの日本人クラブのテニスの大会で「1 回カップを取った」、すなわち優勝した[27]。

ベルリンカップを手に（日銀ベルリン支店勤務時代の岡崎嘉平太）
（（公財）岡山県郷土文化財団所蔵）

岡崎は、一高時代にドイツ語を学んでいたこともあり、ドイツ人は「勤勉だということ」など、多少ドイツ人のことを知っていたつもりだったという。そのような岡崎の目から見ても、岡崎はじっさいにドイツで生活をしてみて、「ドイツ人が実に勤勉であることには感心していた」という[28]。また岡崎はドイツ人の印象について「非常に几帳面だということには感心しましたけど、融通が利かないという点も感じましたね。しかし融通が利かないのは、前もって、彼らは融通が利かないんだという心積もりで対応すると困らないです」とも述べている[29]。

岡崎は「ドイツに行っても新聞記者がするような勉強をする必要はない」という中根からの訓辞を守り、「ドイツのことを勉強するのに、ただ新聞や雑誌を読んでいるようじゃあドイツの実態は分かりはしないから、いい友達を作ろうと思って」ライヒスバンクのシャハト総裁経由で、ライヒスバンク局長よりチールシュを紹介してもらった[30]。そして岡崎は、チールシュと一緒にドイツの北方になるヒッデンゼー島[31]に海水浴に行くなど[32]、チールシュと親交を重ね、分からないことはなんでもチールシュに聞き、チールシュも「これは岡崎に知らせてやった方がいい」といって岡崎にいろいろな情報を提供したこともあり、岡崎曰く「ドイツに滞在している他の日本人よりはナチスの勉強をよくしていた」ようである[33]。

岡崎がドイツでこのような生活をおくっていたちょうどそのころ、ドイツ国内では、アドルフ・ヒットラー宰相のもとナチス支配による、「第三帝国」の時代を迎えようとしていた。ヒットラーは国会議事堂放火事件を口実に国家緊急権（憲法 48 条 2 項）に基づいた大統領緊急令を発令した。そしてヒットラーは当時最も民主的な憲法だとされていたワイマール憲法下で権力を掌握した。ここに「ナチスの時代」が幕を開けた[34]。

岡崎も、のちに第二次世界大戦が進行していくなかで結果的に先述した

ように多くのユダヤ人の命が奪われることとなる、このようなナチスの「人種主義的な扇動」による「国粋主義」と「対外膨張を求めた」初期の様子に危機感を抱いていたようである[35]。岡崎は、ドイツがこのようなナチス支配下の「第三帝国」に突入していく、当時の「ナチスの台頭とドイツの政治情勢」について、つぎのように振り返る。

> 僕がドイツに着いた頃から、ナチス、ヒットラーが出て、ああいう右翼的な動きをやり出したんです。…そういうことでナチスの勉強は随分やったですよ。そしてやっていると、「ナチスが第一次大戦の復讐をやる」という噂が流れだした。第一次世界大戦でドイツを負かした連合国は、当時、天文学的な賠償金を取ってドイツ人を苦しめていたところへヒットラーが出て来て、私が総統になったら賠償金を破棄してやると、そういうことを言うんで、案外ドイツ人はみんなナチスを礼賛していたんです。
>
> しかし、ナチスの実態を見ていたり、ドイツ人からいろいろ話を聞いていると、僕はどうしてもナチスの言うことに感心できなかった。だから、ナチスと日本の軍部があんまり親密にしだしたときに、過ちをやるんじゃないかと思っていたら、それが実際そうなったですね。
>
> （『岡崎嘉平太伝』134-135 頁）

岡崎によるこのようなナチスの台頭やドイツの政治情勢の分析は、つぎのような観点から妥当であるといえる。

「国民」総動員の総力戦であった第一次世界（欧州）大戦は、ヨーロッパにおけるナショナリズムに基づいた統治形態としての「国民国家」の流行と「王朝国家」の終焉の契機であったと同時に、「国家」の統治者たち

には多くの市民が持ちはじめた「共同体への帰属意識」を「国民意識」や「国威発揚」に変換させることが要求された。総力戦にあたって、国家にその国に住む市民をいかに能動的に従属させ、「国民」が「国家」にたいして「死をも厭わないほどの深い同胞愛に満ちた」帰属意識を持たせる必要性があったからである。少なくとも“ヨーロッパにおける国際舞台”において――国家の統治者が「王家」や「貴族」ではなく、「国民」の代表者であるという建前の下に成り立つ――「国民国家」が正統な国際規範となった。1922 年までに、ハプスブルク、ホーエンツェルン、ロマノフ、オスマンの各王家は「波間に消え去ってしまった」。さらに「国際連盟にあっては、存在する少数の帝国といえども帝国の制服ではなく国民衣装を身にまとって出席した」のである[36]。

このように第一次世界大戦後のヨーロッパにおいて「国民国家」が正統な国際規範となった。しかし「国民国家」は、ベネディクト・アンダーソンがいうように所詮は「常に、水平的な深い同士愛として心に思い描かれる“想像の共同体”」でしかない。しかしながら、この「深い同士愛」が描かれるが故にときに多くの「国民」が――家族愛・同胞愛として――「国家」の為に死んでいったのである。

こうしたなかで起こった第一次世界大戦に敗北したドイツにおいて多くのドイツ人が、「ドイツ人」としての誇りや自信を喪失し、さらには“突き詰めればたかが「想像の共同体」でしかない”ような「ドイツという国」にたいして不信感をもっていったことは容易に想像できる。なぜなら第一次世界大戦で多くのドイツ人たちは、「ドイツという国」のために多くの「ドイツ人同胞たち」が犠牲を払ったにもかかわらず、「ドイツという国」の敗戦のせいでフランスに「天文学的な賠償」金を取られたためさらにドイツ人が苦しめられたからである。

このように敗戦によってナショナル・アイデンティティをなかば喪失していた多くのドイツ人たちが求めたことは、「ドイツ人」というナショナル・アイデンティティの再生であり、これはゲルマン民族意識の高揚によってゲルマン民族の誇りと自信を取り戻すことを意味していた。このような状況を巧みに利用して政治に進出してきたのが、ヒットラーを筆頭とするナチス勢力であった。

ナチス政権下のドイツのナショナリズムは、ジョージ・オーウェルの「ヒットラーは「諸君には闘いと危険と死を約束する」と言う。そしてその結果は、全国民が彼の足下に身を投げ出すのである。…「終りなき恐怖よりも、恐怖とともに終ろう」というほうが効くのである」（『オーウェル評論集』小野寺健訳、岩波文庫、1982 年、220-221 頁）という有名な一節に収斂されるように、第二次世界大戦では多くのドイツ国民は自己の生命を犠牲にしてまで「ドイツという“国の為”」に戦争に協力していった。

そして、オーウェルは、第二次世界大戦で多くのドイツ国民が自分たちの命を犠牲にしてまで戦争に協力していったその要因を次のように分析する。

> ヒットラーには快楽主義的人生観の誤りがよくわかっている。前大戦以来、ほとんどの西欧思想、というより「進歩的」思想にいたってはそのすべてが、人間は安楽と安全と苦痛をのがれる以上のことは望まないと、暗黙のうちにきめてかかっている。こういう人生観には、たとえば愛国心とか武勲といった思想の存在する余地はない。社会主義者は自分の子供がおもちやの兵隊で遊んでいると動転するが、だからといって代りのおもちゃを見つけてやることはできはしない。おもちゃの平和主義者というのでは、どうにも格好がつかないのだ。ヒッ

トラーは楽しみを知らない人間だけにこれが珍しくよくわかるので、人間が欲しがるのはかならずしも安楽、安全、労働時間の短さ、衛生、産児制限、また一般的に言って常識といったものばかりではないということも、わかるのである。人間は、…闘争とか自己犠牲をも望むものだし、太鼓とか旗とか観兵式などが好きなのは言うまでもない。…ファシズムとナチズムはいかなる快楽主義的人生観よりもはるかに強固なのである。…偉大な独裁者は、いずれもその国民に耐えがたい重荷を強制することによって、自己の権力を強化したのであった。

（『オーウェル評論集』220-221 頁）

しかし、当時のドイツ国民の多くがヒットラー政治に熱狂したというナチズムによるナショナリズムは必ずしもオーウェルのいうような要因だけであるとは考えられない。もう 1 つの見方として、イギリスやフランスというドイツにとっての「敵国」の存在が少なからずあるのではなかろうか。ミヒャエル・ヤイスマンは著書『国民とその敵』のなかで「『敵の祖国』では…「敵」が国民意識の不可欠の構成要素であることを強調する。国民を創り上げるうえで…ナショナリズムの不可欠な内在的構成要素としての「敵」の存在という指摘は…20 世紀の歴史を理解するうえでも重要である」[37] と指摘する。したがって、総力戦の時代において、多くの人々を「国民」として戦争に動員するためには、政治共同体への国民の帰属を「ナショナリズム」と呼ぶなら、“「国家」という「想像の共同体」である「政治共同体」”にたいする帰属意識を「国民」に持たせる為にも、「ナショナリズム」を発露させるための、“ゲゼールシャフト（Gesellschaft）”と“ゲマインシャフト（Gemeinschaft）”の政治的統合 [38] による「ナショナリズム」が必要不可欠であったといえる。ヒットラーは、フランスやロシ

アを敵視したり、ユダヤ人を差別したりすることで、この「ナショナリズムの不可欠な内在的構成要素としての「敵」の存在」を巧みに演出してみせた。

結果的にヒットラーを受容してしまったドイツは、20 世紀の世界大戦で 2 度目の敗北を喫し、米英仏露に国を直接占領されるという屈辱を受け、これまで獲得した領土を基本的にすべて失い、さらには国を東西に分断されてしまった。

ナチスの民族主義の本質は、以上をみてもわかるように、ゲルマン民族意識の高揚によって民族の誇りと自信を取り戻すという大義名分のもとに結局のところ「ナショナリズムの不可欠な内在的構成要素としての「敵」の存在」を“ユダヤ人差別を軸とした人種主義”や排外主義、膨張主義に求めているに過ぎない。しかし、当時の日本の軍部はそれでしかないようなナチスを猛烈に評価していた。

岡崎は、当時の日本でのナチスの評価に関して、「当時、日本の軍部はナチスを猛烈に評価していた[39]」と、当時の日本の軍部が「人種主義的な扇動によって国粋主義を刺激し、積極的に対外膨張を求めた」ナチスを猛烈に評価していたと、振り返る。岡崎は、その理由を、「ヒットラーが書いた『マインカンプ[40]』を日本語に訳した『わが闘争』という本が出ていたんですが、それを読むと、ナチスは日本人と仲良くする、或いは日本を尊敬するようなことを書いているもんですから、軍がナチスに惚れたんでしょうね[41]」と分析する。

しかし岡崎は「ナチスを猛烈に評価していた」という日本の軍部の評価とは対照的な印象を持っていたようである。岡崎はその理由を自身が実際に原文のドイツ語で書かれた『マインカンプ』を読み、そのなかで「日本の悪口を書いている所がある」のを見つけたからだと説明する。さらに

「日本の軍部」が「ナチスを猛烈に評価していた」要因を、「日本ではその所を翻訳しなかったもんだから、皆ドイツは日本に惚れているくらいに考えていたんじゃないですか[42]」と指摘する。「（『マインカンプ』で日本の）悪口を書いている所を読んでいるから、うっかりしちゃあ駄目だぞと、まあ、そういうことを言っていた」と当時のことを思い出す[43]。

ところで上記のように岡崎は『マインカンプ』を読んで「日本の悪口を書いている所がある」のを見つけたというが、岡崎はいったい『マインカンプ』のどの箇所を読んでそう考えたのだろうか。これについて以下の 2 つの視点から考えたい。

まず 1 つめの視点は、ドイツ語の原著『マインカンプ』を日本語に翻訳するさいに翻訳者がヒットラーの人種主義的だと思われるような記述をあえて日本語に訳さなかったり、あるいは完全に削除したりした箇所を、岡崎が原著と読み比べて発見し、それを根拠に指摘した可能性である。

この視点から考察すれば、こういうことになる。

ヒットラーの『マインカンプ』は、日本では 1932 年に坂井隆治が訳した『余の闘争』が内外社から出版された。だが坂井の訳著は基本的に下巻にあたる「国家社会主義運動」の部分しか訳されていないため[44]、1930 年代前半に訳著でしか読んだことがない者は、おそらく上巻でヒットラーが記した多くは知り得なかった可能性がある。上巻にあたる「民族主義的世界観」の一部が翻訳されているものの、それはヒットラーが日本を評価している箇所は翻訳されていても原著のドイツ語では記述されているような「日本の悪口」のような箇所は訳著では翻訳されておらず、そのため訳著で読んだ彼等はこうした記述に触れることができなかった。

実際にヒットラーは『マインカンプ』のいくつかの箇所で日本について言及している。そのなかで、日本のことをつぎのように“猛烈に”評価し

国会議事堂（Reichstagsgebäude、ドイツ・ベルリン）
（撮影：2015年著者。撮影協力：栗原麗羅氏）

ブランデンブルク門（2015年ベルリンにて著者撮影）

ホロコースト記念碑（Denkmal für die ermordeten Juden Europas）
ナチス政権下のドイツによるホロコーストで虐殺され犠牲となったヨーロッパのユダヤ人のための記念碑（2015年ベルリンにて著者撮影）

ている箇所がある。

日露戦争は、すでにわたしが大きくなっていたし、また注意深く見たのである。わたしはそこではほとんど国家主義的理由から一方にくみし、当時われわれの意見を決定するさいには、ただちに日本の側に立ったのである。ロシア人の敗北の中にまた、オーストリアのスラブ主義の敗北を見ていたからだ。
（アドルフ・ヒトラー『わが闘争（上）Ⅰ民族主義的世界観』平野一郎、将積茂【訳】、角川文庫、1973 年、210 頁）

その一方で、ヒットラーは日本のことを、つぎのように述べている。

もし、人類を文化創造者、文化支持者、文化破壊者の 3 種類に別けるとすれば、第 1 のものの代表者として、おそらくアーリア人種だけが問題となるに違いなかろう。…日本は…自分の文化にヨーロッパの技術をつけ加えたのではなく、ヨーロッパの科学と技術が日本の特性によって装飾されたのだ。…かりに…すべてアーリア人の影響がそれ以上日本に及ぼされなくなったとしよう。その場合、短期間はなお今日の日本の科学と技術の上昇は続くことができるに違いない。
しかし…泉は水がかれてしまい、日本的特性は強まってゆくだろうが、現在の文化は硬直し、70 年前にアーリア文化の大波によって破られた眠りに再び落ちてゆくだろう。だから、今日の日本の発展がアーリア的源泉に生命を負っているとまったく同様、かつて遠い昔にもまた外国の影響と外国の精神が当時の日本文化の覚醒者であったのだ。
その文化が後になって化石化したり、完全に硬直してしまったとい

う事実は、そのことをもっともよく証明している。こうした硬直は、元来創造的な人種の本質が失われるか、あるいは、文化領域の最初の発展に動因と素材を与えた、外からの影響が後になって欠けてしまう場合にのみ、一民族に現われうる。

ある民族が、文化を他人種から本質的な基礎材料として、うけとり、同化し、加工しても、それから先、外からの影響が絶えてしまうと、またしても硬化するということが確実であるとすれば、このような人種は、おそらく、「文化支持的」と呼ばれうるが、けっして「文化創造的」と呼ばれることはできない。

（アドルフ・ヒトラー『わが闘争（上）Ⅰ民族主義的世界観』平野一郎、将積茂【訳】、角川文庫、1973 年、377-379 頁）

ヒットラーがここで日本について言及していることは、文明社会であるヨーロッパ諸国の先進的な文化を未開社会である日本が受容したからこそ文明が開化したという進歩史観に基づいた見解と相違ないのかもしれない。しかし、この議論においてそもそも「もし、人類を文化創造者、文化支持者、文化破壊者の 3 種類に別けるとすれば、第 1 のものの代表者として、おそらくアーリア人種だけが問題となるに違いなかろう」という前提は果たして適切であるといえるだろうか。つまり、前提条件を見ずに部分だけ切り取って読んでみれば、当時の日本を客観的に位置づけていると錯覚しかねないが、じっさいはこのようにアーリア人種の優位性を前提とした人種的価値観・人種差別的な背景を議論の前提として論じているにすぎないのである。つまり、『マインカンプ』のなかでヒットラーは、日露戦争など一部において日本を評価して書いている箇所がある反面、アーリア人種の優位性を前提とした人種差別に基づいて「日本の悪口」を書いてい

る箇所も存在するのである。

岡崎はこのようなドイツ語の原文で書かれた『マインカンプ』を読んでいる。だから、岡崎がヒットラーの“ドイツ語原文・原著”と“日本語に翻訳された訳著”の“両方”の『マインカンプ』を読んだことにより、“ドイツ語の原文・原著”だけにこのような「日本の悪口を書いている所がある」のを発見したのではなかろうか。他方、日本語訳しか読んでいない日本の軍部の人間は、そこが翻訳されていなかったためそれを見落として「ドイツは日本に惚れている」と理解したのではないか、という見方ができる。

つぎにもう 1 つの視点は、原文のニュアンスと訳文のニュアンスの違いを感じ取り、岡崎がそのようなニュアンスを含めて「日本ではその所を翻訳しなかった」と述べている可能性である。岡崎がヒットラーの『マインカンプ』（『わが闘争』）を読んで「日本の悪口を書いている所がある」と感じたのは、例えば『マインカンプ』の

> …ユダヤ人は、自分達の千年にわたる順応によってヨーロッパ諸民族の基礎を掘り崩し、かれらを種族の性格を失った雑種に養育することはなるほどできるにしても、しかし日本のようなアジア的国家主義国家に同じ運命を与えることはほとんどだめだということをじゅうぶん知っている。今日ユダヤ人はドイツ人、イギリス人、アメリカ人、そしてフランス人のふりをすることはできるが、黄色いアジア人に通じる道はかれらには欠けている。したがってかれらは、日本という国家主義国家をやはり今日同じような構造をもつ国々の勢力によって破壊しようと企てるのであるが、それはこの危険な敵のこぶしによって、最後の国家権力が防御力のない諸国家を支配する専制に変ってしまう

以前に、その敵を片付けるためである。

ユダヤ人は自分達の至福千年王国の中に、日本のような国家主義国家が残っているのをはばかり、それゆえ自分自身の独裁が始められる前にきっちり日本が絶滅されるよう願っているのである。

したがってかれらは、以前にドイツに対してやったように、今日日本に対して諸民族を煽動しており、それゆえ、イギリスの政治がなおも日本との同盟を頼りにしようと試みているのに、イギリスのユダヤ人新聞はすでにこの同盟国に対する戦争を要求し、民主主義の宣伝と「日本の軍国主義と天皇制打倒！」のときの声の下に、絶滅戦を準備するということも起こりうるのである。

（アドルフ・ヒトラー『わが闘争（下）Ⅱ国家社会主義運動』平野一郎、将積茂【訳】、角川文庫、1973 年、338 頁）

という一節における「今日ユダヤ人はドイツ人…のふりをすることはできるが、黄色いアジア人に通じる道はかれらには欠けている」という箇所がそれであると考えられる。その理由はこれまでの岡崎自身の政治思想と中国観に求めることができる。岡崎は、一高時代に中国からの留学生龔徳柏と出会い、彼から上海のイギリス租界の公園に「犬とシナ人入るべからず」という制札があるという話を聞かされ、「この中国人を馬鹿にした制札は、単に中国人だけに向けられた侮辱じゃない。東洋人全部、日本人にも向けられた侮辱だ」と感じ、この時から「いつかこういうアジア人蔑視の思想を撤廃させなければいけない」という信念を持ち続けるようになった。そしてこうした信念の持ち主である岡崎が、指摘した箇所にあるような「黄色いアジア人」という表現を「日本の悪口」だと理解するだろうことは容易に想像できるし、さらに、この箇所を「ユダヤ人は西洋人のふり

をすることはできるが、“我々西洋人とは肌の色が違う”黄色いアジア人に通じる道は彼らには欠けている」と理解・解釈して「日本の悪口を書いている所がある」と指摘している可能性もある。

岡崎がヒットラーの『マインカンプ』やナチスやナチズムをこのように認識していたこともあり、岡崎は当時の日本の駐ドイツ大使であった小幡酉吉とは「話がよくあっていた」ようである。ちなみに小幡は「1920 年代に現地（中国）において日中協調外交を推進した」人物である[45]。岡崎は、そんな「話がよくあっていた」小幡について、「当時、日本の駐独大使で小幡酉吉さんという人物が居て、私はその人に非常にかわいがられていましたので、小幡大使によく官邸に呼ばれて話をしていたんです[46]」と岡崎と小幡の関係を述べたうえで、つぎのように振り返る。

> 小幡大使は、「日本の軍があんまりナチスに寄って行くと戦争に巻き込まれる。戦争になると必ずしも日本が勝てるとは思えない」と心配してね、「岡崎君もしっかりしてくれよ」と言われた。私は『マインカンプ』の内容をある程度他の人よりよく知っているものだから、小幡さんと話がよく合っていた。……大使館に行くと、「どうも最近の日本の軍には困ったものだ。これからどうなるのかなあ」と言われてしまいました。しかし、どうも軍の横暴を防げなくて、結局世界戦争に巻き込まれることになりましたけど。まあしかし、物事を考える上で非常に勉強になったですよ。（『岡崎嘉平太伝』136-137 頁。）

また岡崎が日銀ベルリン支店駐在時代ベルリンにある日本大使館には陸軍武官が駐在していた。その当時の武官は坂西一良という陸軍中佐であった。坂西は後に中将となるが、中国で戦死した。そんな坂西は、ベルリン

駐在時代、酒が好きであった。そのため岡崎は「よく坂西の家に呼ばれ、一緒に酒を飲んで話をした」という[47]。

ヒットラーが「第三帝国」の宰相に任命された年の5月、岡崎は日本に帰国し、日銀本店営業局勤務となった[48]。そして岡崎が日本に帰国した6年後の1939年9月1日、ナチス・ドイツ軍がポーランドに進出した。ヨーロッパでは、ここにナチスによる戦争、第二次世界大戦がはじまった。

３．ドイツから帰国後の岡崎

話は岡崎が日本銀行ドイツ・ベルリン支店に赴任される少し前の1929年までさかのぼる。1929年は日本航空輸送株式会社が東京―大阪―福岡の定期便を開設したり、岡崎の長男岡崎彬氏（岡山ガス社長、日本航空勤務。6章§3「息子として60年」引用箇所参照）が生まれたり、犬養毅（号は「木堂」）が政友会総裁に就任したりした年であった。また“世界恐慌”という世界史的な出来事として知られるニューヨーク市場で株価大暴落が起きたのも同年（1929年10月24日）である。そんな1929年に岡崎はベルリン支店への赴任を命じられた。岡崎は犬養とは、高校時代に所属していた弁論部で犬養から弁論術の指導を受けたこと（1章§3参照）や犬養毅が岡山県の先輩だということもあり、以前から交流があった。そのため11月の暮れにベルリン支店赴任の別れの挨拶をしに犬養邸を訪れた[49]。これが岡崎にとって最後の犬養毅との面会になった。

1930年、前年10月に起きた“世界恐慌”の煽りを受け日本でも“昭和恐慌”が起きていた。「大学は出たけれど」就職先がなかなか見つからない。大学生の多くは就職難に直面していた（詳細は井上寿一『戦前昭和の社会――1926-1945』講談社現代新書、2011年、83-92頁参照）。こうした経済不況による「不安」に刺激されるかたちで排外主義や民族主義、国家

主義のムードが高まるなかで「協調外交」路線の幣原喜重郎を外務大臣に起用した民政党の濱口雄幸内閣（息子「濱口雄彦」1 章 §4-2 参照）は同年 4 月にロンドン海軍軍縮条約に調印した。「協調外交」路線を目指した濱口内閣のこの決断は英断であった。だがこの条約調印が日本国内の反発を招くのは当然であった。同年 11 月、濱口雄幸は右翼に東京駅で襲撃された。

民政党の若槻礼次郎内閣を経て、政友会の犬養毅内閣が成立すると、犬養内閣で大蔵大臣に任命された高橋是清は、1931 年 12 月に金輸出を再禁止した。ここに日本の為替システムは金本位制度から為替管理制度へと移行した。そのころ岡崎はベルリンで「ドイツの為替管理制度」について調べていた（詳細は後述）。したがってドイツから帰国後、日本銀行本店の為替部門に配属されることとなる岡崎は、ドイツで為替管理制度について学んだ経験が大いに役立ったのである。

岡崎が単身赴任でドイツに駐在していたころ、1931 年 9 月 18 日に起きた満州事変とさらに翌（1932）年 3 月に愛新覚羅溥儀を皇帝とし「五族協和」を唱えた満州国が建国されたことによって、日中関係は悪化していた。1931 年 12 月に成立した犬養内閣はもはや軍部の暴走に抵抗する術はなかった。「犬養個人は満州国の建国に反対だった。しかし…犬養内閣は（満州国の）建国過程を傍観するにすぎなかった[50]」。1932 年 5 月 15 日、武装した海軍青年将校や陸軍の士官候補生たちが首相官邸を訪れた。内閣総理大臣犬養毅は「話せば分かる」と説得を試みるも彼らによって射殺された。

このように岡崎がドイツでナチズムを観ていたころ、日本は政党政治の時代が終焉しファシズム（軍国主義）の時代に移行しつつあったのである。

1933 年 2 月 24 日、「国際連盟規約第 15 条第 4 項に基づく対日非難勧告

案」の採択がおこなわれた国際連盟臨時総会で、日本全権者であった外務大臣松岡洋右は「脱退の意思表示」として「決別の演説ののち、「堂々と」議場後方の出口へと向かった[51]」。松岡が「堂々と」退場したことにより、「日本が自ら進んで脱退した以上、国際連盟側は事実上、日中戦争から手を引いていく[52]」。そして、日本が国際連盟を脱退した「1933 年を境として、満州事変以来の対外危機が鎮静の方向に[53]」向かっていく。そんな同年 6 月、岡崎は赴任先のベルリンから日本に帰国し、本店勤務となった。

このように岡崎がドイツから帰国したときの日本は軍国主義の世の中へと変容していた。そして岡崎は大学生時代から日銀ベルリン支店赴任時代までの自身の経験からこうした日本の軍国主義化を痛感していた。

事実、岡崎が大学生のころは「社会主義的な空気がどんどん進んでいるとき」であった。くわえて、軍の力は「まだどうということはなかった」けれども、「それでもぽつぽつ軍が強くなってきているとき」でもあった。岡崎は大学卒業後、日銀に入って間もなくドイツ・ベルリンに駐在した。岡崎はベルリン駐在中に「武官と言われる人たちとよく酒を飲む」機会が多かったため「陸軍や海軍の武官府には割合知人が多かった」。そしてベルリンではそういう人たちと交流があったため、岡崎はそのときに「軍が暴れだす前兆」を見ていたようである。

岡崎は「軍が暴れだす前兆」として、岡崎がベルリンの日本人クラブ会長をしていた際に「後で有名な参謀になった」当時大尉で陸軍武官付だった高嶋辰彦がベルリンに居る日本人一同を前に「…軍人が馬鹿にされている考えでもって話をして、「我々が持っている銃剣がどっちに向いているかご存知ですか。これは敵に向かっているのではありません。日本の資本家に向かってるんですよ」ということを話した」（『岡崎嘉平太伝』159-160 頁）と語っている。

高嶋の話には後日談がある。岡崎と高嶋は「日本に帰ってもその議論をしていた」。あるとき、岡崎は、高嶋が「人に聞かれないようにというので、芝浦の料亭を借り、その 2 階を全部開けっ放しにして、そこで 2 時間くらい議論をやった」。だが「結局、結論が出ないで別れた」。このような経緯から、そのとき岡崎は「その当時、軍がどうして威張り出したかという問題が気になり出した」という。そして岡崎はその理由を、自身の体験談を交えて、つぎのように説明している。

> 我々が小学校の終わりから中学に行く頃は、農村部の経済状況が非常に悪かったんです。…農村部が非常に貧乏しましてね。貧乏人が上級学校に行こうと思っても収入が無いから行けない。…それで軍人になった者が多かったと当時言われておったですよ。
>
> 岡山中学校には先輩が来てよく軍人に誘っていたんですよ。「近眼になったから駄目だ」と言ったら、「主計将校になれば近眼でもいいんだ」と言うから、僕は「主計は兵隊じゃないじゃないか」と言ったら怒られた。とうとう行かずに済んだんですよ。
>
> （『岡崎嘉平太伝』160 頁）

このように当時の日本では「農村部の経済状況が非常に悪かった」ため貧乏が理由で「軍人になった者が多かった」。ところが、「岡山県出身の有名な」宇垣一成が「機械部隊を作らなきゃこれからの戦争には役には立たない」と考え「予算が苦しいときで新規の予算が貰えない」ため 4 個師団を削減することでそれを財源に機械部隊を作るなど、師団の削減をおこなった。そのため「大佐クラスになるともう行く所が少なく」なった。企業でポストが減ったことが原因で出世できなくなった従業員が会社や経営

者側に反感を持つのと同じように、「軍人にとっても、ポストが減るというのは非常に反感を持っていた」ようである。

これを裏付けるように、前述したベルリンの日本大使館駐在陸軍武官の坂西一良は、岡崎に宇垣が行った4師団削減について「軍人というのは閣下と呼ばれるのが非常な名誉なんです。閣下の職が12も減ったら、軍人が干上がってしまう」などといっていた。また坂西は岡崎に「岡崎さんも…人事のことをよっぽど勉強しなさい。気を付けてやりなさい。増やせるときだからといって職員を増やし過ぎると、後で彼らは出世の道がなくなると不平を持つようになります。軍人が正にそうなんですよ」と助言した。そして岡崎は、関東軍の暴走によって満州事変が起こる少し前の世界恐慌を受けた昭和恐慌の頃の「昭和2～3年頃からだんだん軍が威張り出した」、と結論付けている[54]。

ここでドイツから帰国後の岡崎の日銀での仕事に関して言及したい。ドイツから帰国した岡崎は日銀本店で「4年くらい為替部門を担当させられ」た。岡崎はそんなドイツから帰国後の日銀での仕事に関して「日本が戦争の準備をしているときだったから、外貨が足りなくなるんで為替管理っていうのをやり出したんですよ。それで丁度ドイツに居るときに、ドイツの為替管理制度を調べていたので、これが役立ちました[55]」と振り返る。また岡崎は、ドイツ人の友人チールシュがまとめたのを岡崎が日本語に翻訳した『ドイツの為替管理についての報告書』が、日本に帰国してから「本当に役に立った」とも述べている[56]。

岡崎は「チールシュをはじめ多くのドイツ人と深く交際したために、同じようにドイツに行ってもおざなりの、型にはまった交際をした者よりは、ドイツ人のものの考え方についてよく知っていた[57]」と「ドイツ通」を自負していた。そのため、岡崎は、「ドイツが戦争のときにどうやった

かということを調べていたんだから、日本銀行も万一のときに備える意味で、帰国後、「日本における戦時金融政策」という論文を書いて上司に差し出した[58]」という。だが、「日本銀行員には前から、「日本銀行員たるものは政治に関与するべからず」という総裁訓示がある」ため、岡崎は「それを超えて軍事に関与しているじゃないか」と、「大抵の上司からは叱られた」という[59]。そして岡崎は、このような「大抵の上司」の態度が「後に、私が日本銀行から離れるようになった元じゃないかと思うんです[60]」と、当時の心境を振り返っている。

第３章：日中戦争と上海勤務時代

岡崎嘉平太は、戦後（つまり、日本の日中戦争およびアジア太平洋戦争敗戦後）、ANA（全日空）2 代目社長を勤めながら LT 貿易の締結に携わったり、日中綜合貿易連絡協議会会長や日中経済協会常任顧問を歴任したりするなど日中友好事業や日中経済交流事業に尽力した（序章参照）。また岡崎が戦後に「日本と中国との友好に尽くした」のは否定のしようが無い客観的な事実である。これらを裏付けるように、「日本と中国の友好に尽くした」岡山県名誉県民である岡崎の功績と人柄をたたえることを目的に岡崎嘉平太記念館が設立され、さらに ANA（全日空）2 代目社長であった岡崎が「国交回復前の日本と中国の友好に力を尽く」した功績をたたえ、岡崎が標榜した「アジアの国における人づくり」を実現することを目的に、1990 年に ANA（全日空）をはじめとする関係者によって岡崎財団（岡崎嘉平太国際奨学財団）が設立されている[61]。

このように、岡崎が戦後に「日本と中国の友好に尽くした」ことは周知されている。しかし、意外なことに、戦中期の岡崎が何をやっていたかに

関しては“空白部分”が多く、あまり知られていないようである。また“空白部分”の肩書きだけをみれば戦中の岡崎が「中国侵略の先鋒隊長」や「（中国からみれば）悪玉」のような存在だったと誤解される恐れがあ

華興商業銀行開業記念撮影（（公財）岡山県郷土文化財団所蔵）

華興商業銀行東社宅の中庭で（（公財）岡山県郷土文化財団所蔵）

る（ただし、天児慧は「（岡崎は）日中戦争期の自らの行動を深く真摯に反省し…た」「まさに「歴史を教訓にした人」の典型」だと肯定的に評価している。天児『日中対立』207 頁）。したがって本章ではこうした戦中期の岡崎の“空白部分”や岡崎が本当に「中国侵略の先鋒隊長」や「（中国からみれば）悪玉」のような存在であったのかを解明したい。

岡崎は、日中戦争がはじまってから敗戦までの間、――何度か日中を行き渡りしながら―多くは中国上海で仕事をしていた。戦中期の岡崎の仕事を簡潔に述べると、戦中期の岡崎は主に、①陸軍省事務嘱託として上海駐在（1938 年、日本銀行勤務時代）、②華興商業銀行理事（1939 年 -1942 年、上海）、③大東亜省参事官（1942 年、東京）、④在中華民国上海日本大使館参事官（1943-1946 年、上海）、⑤その他、公職の委託・嘱託引受、の 5 つの仕事をしていた。本章ではこのうちの、「華興商業銀行理事時代」と「在中華民国上海日本大使館参事官勤務時代」を詳細に扱い、「大東亜省参事官勤務時代」を簡潔に扱うこととしたい。

日中戦争がはじまってから敗戦までのこうした岡崎の上海勤務時代は、日中戦争下における岡崎の大東亜省参事官（高等官 2 等）大臣官房審議室勤務や在中華民国上海日本大使館事務所参事官勤務などといった経歴や職歴の肩書だけをみれば、日中戦争を“日本による侵略戦争”だったと位置付けるのならば、岡崎は日本の中国侵略（進出）行為に関与した侵略戦争への協力者だったという見方もできるのかもしれない。事実、戦後、岡崎は戦争犯罪者（戦犯）として公職追放されている（ただし、1950 年 10 月に公職追放特免により解除）[62]。岡崎の政治思想や中国観を排除して岡崎のこのような経歴だけをみれば、このように、戦後の日中友好の立役者であった岡崎はじつは――多くの中国人にとっては「侵略戦争」でしかなかったであろう――日中戦争遂行や日本の中国侵略（進出）遂行に深く関

与したいわば協力者であったと評価することも可能であるのかもしれない（本章「天児引用箇所」参照）。もちろんこうした解釈を全て否定するつもりはない。しかし、先述したように、岡崎は、岡山中学校時代に中国からの留学生陳範九と出会ったことが「中国に引き付け」られた「原動力」になったと語っている。さらに岡崎は一高時代に出会った中国からの留学生龔徳柏から「犬とシナ人入るべからず」という制札の話を聴いて、「いつかこういうアジア人蔑視の思想を撤廃させなければいけない、同時に日本は中国との仲を悪くしていたら、日本人自身が困る時が来るぞ」と思い、これをきっかけに「日中問題に興味を持った」とも語っている（詳細は1章参照）。このような青春期のころの岡崎の政治思想や中国観を排除してたんに「日本の侵略戦争遂行の協力者だった」と切り捨てるような人物評価は果たして妥当であろうか。

以上の観点から、このような――岡崎の政治思想や中国観を排除した――「経歴」だけに基づいた人物評価は、岡崎の政治思想や中国観を内包した人物評価と同様のことがいえるのか、あるいはじっさいの岡崎もそのような政治思想や中国観であったのか、という疑問が生じる。このような疑問にたいする答えを見つけるための手がかりは、日中戦争・アジア太平洋戦争下に上海で過ごした華興商業銀行勤務時代や大使館事務所参事官勤務時代の岡崎嘉平太の「政治思想」と「中国観」に求めることができよう。

以上を踏まえ、岡崎の経歴と、岡崎の政治思想や中国観をみながら、日中戦争・アジア太平洋戦争下の中国上海勤務時代の岡崎嘉平太の「政治思想」と「中国観」を考察したい。

1．日中戦争と華興商業銀行勤務時代

昭和12（1937）年7月7日、岡崎嘉平太が40歳のときに、中国北京郊

外の盧溝橋で起きた日中両軍による軍事衝突が直接のきっかけとなって、日中両軍による全面戦争、日中戦争が勃発した。日中戦争勃発当初の近衛文麿内閣の対応は、「不拡大方針」「現地解決主義」であった。しかし、中国側の受け止め方はちがっていた。ここにたんなる「北支事変」でしかなかった盧溝橋事件が事実上の全面戦争「支那事変」へと拡大していく。

日中戦争が激化するなか、昭和 12（1937）年 12 月に日本軍（中支那派遣軍）は国民党政権の中華民国首都南京を攻略し、翌（1938 年）年 3 月、日本軍による事実上の傀儡政権である「中華民国維新政府」が南京に樹立された。またこのような「日中戦争の長期化は、国内の総動員化を要求」した[63] ため、昭和 13（1938）年 4 月に政府は「国家総動員法」を制定した。

このように盧溝橋事件がたんなる「北支事変」から「支那事変」へと拡大して日中全面戦争へと発展した戦時下の政治・社会情勢のなかで、岡崎は、陸軍省より昭和 13（1938）年 3 月 16 日から陸軍省の事務を嘱託される。3 月 27 日より、岡崎は陸軍省中支那派遣軍特務部隊として上海に駐在する。同年 11 月より日本軍中支那派遣軍経理部を兼務する[64]。

岡崎が上海に駐在した翌（1939）年 5 月 1 日、岡崎は華興商業銀行の設立に携わり、同銀行の総裁に中華民国維新政府の行政院院長だった中華民国の政治家梁鴻瑞を迎え、そして岡崎は同銀行の理事に就任した。また岡崎は華興商業銀行理事に就任するにあたり同日（5 月 1 日）付で日本銀行を依願退官した。それから数日後の 5 月 16 日、華興商業銀行は開業した[65]。

この銀行について簡潔に説明しておくと、華興商業銀行は、1938 年 12 月 29 日の興亜院の「中支那ノ新事態ニ鑑ミ揚子江開放ニ対スル準備ノ一トシテ又中支那通貨制度ニ対スル我方ノ援助竝指導ノ基礎ヲ樹立スル為自由ニ外貨兌換セラルベキ銀行券ヲ発行シテ外国貿易金融ヲ行フベキ銀行ヲ速ニ設立」[66] するという方針のもとに「銀行券ヲ発行シテ外国貿易金融ヲ

行フノ外之ニ付随シテ一般銀行業務ヲ行フ」ことを目的とした「華興商業銀行設立要綱」と 1939 年 3 月の「華興商業銀行ハ第三国協力ノ有無ニ拘ラズ之ヲ設立スルモノナルモ務メテ第三国ヲシテ本銀行創立ノ趣意ヲ了解シ本銀行券ノ円滑ナル流通ニ協力セシムルコトヲ主眼トシ…第三国側ニ折衝スルモノトス[67]」という方針を示した「華興商業銀行設立ニ伴フ対第三国折衝要領」の会議決定を受け、中華民国維新政府の「華興商業銀行暫定条例」に基づき 1939 年 5 月 1 日に中華民国維新政府特設の金融機関として設立された銀行である。なお、華興商業銀行の資本金は 85 千万円であり、このうち、維新政府が半額出資し、日本側は、三井、住友など 6 銀行が半額出資した。本店は上海に置かれ、支店は蘇州、南京、杭州などに開設された[68]。また華興商業銀行は「特権として維新政府より紙幣（華興券）発行権が与えられた[69]」。しかし華興商業銀行が発行する華興券は「国民政府の通貨（法幣）に押されてあまり流通せず、その使用は、関税関係等に限られていた[70]」。そのため 1940 年 3 月に汪兆銘傀儡政権「国民政府」が樹立されたさい、同政権の「中央銀行として、中央儲備銀行が設立…されることとなり、同（昭和）15 年 12 月華興券の発行は停止された[71]」ようである。

岡崎はまた、華興商業銀行の理事をする傍らでさまざまな公職を兼務していた。華興商業銀行が開業して間もない昭和 16（1941）年 1 月 25 日、岡崎は、当時東亜研究所総裁であった近衛文麿より財団法人東亜研究所上海支所調査顧問を委託される[72]。2 月 7 日、岡崎は、居留民団法施行規則に基づき、在上海総領事より、上海居留民会議員を命じられる。4 月 1 日、在上海総領事より、昭和 16 年度上海居留民団復興資金審査委員を嘱託される[73]。それから数日後の 4 月 16 日、岡崎嘉平太は 44 回目の誕生日を迎える。そして、この年の 10 月 18 日、日本では東條英機内閣が成立。同年

12 月 8 日、連合艦隊司令長官山本五十六元帥がハワイ真珠湾奇襲をおこない、米英に宣戦布告をおこなった。ここにアジア太平洋戦争が開戦した。そしてアジア太平洋戦争開戦の 2 日後の 12 月 10 日、岡崎は、在上海総領事より、臨時総領事館事務を委託された[74]。

このように、岡崎にとって最初の上海勤務時代であった華興商業銀行勤務時代は、まさに日中戦争が開戦してから間もない日中戦争が激化していくなかでの「激動の時代」であった。そして、このような「激動の時代」であった華興商業銀行勤務時代を岡崎自身がどう認識しているのかを、以下にみていきたい。

【1-1：華興商業銀行理事就任】

岡崎自身が華興商業銀行勤務時代をどう認識しているかを知るためには、その前にまず岡崎が華興商業銀行理事に就任することになった経緯とそれを岡崎自身がどう認識しているかを知らなければならない。

岡崎は、華興商業銀行に勤務することとなった経緯を、次のように、説明する。

1937 年 7 月 7 日に日中戦争がはじまってから、「殊に日本の軍とか日本の実業家は上海に一番多かった」こともあり、当時日本銀行調査局長であり、のちに蒙彊銀行総裁となる、宗像久敬が軍の顧問（参事）として、1938 年 10 月から半年間ほど、上海に駐在していた。岡崎によると、そんな宗像は「日本銀行に勤めているような人だから、何とかして、日中戦争を早くやめなきゃいけないということを考えていた」という[75]。そしてまた岡崎によると、宗像は「日中関係を解決するのには、貿易に役立つ通貨を発行するため、中国に治外法権を持っているような有力な国が出資して、為替銀行を 1 つ作り、そこへ各国から人を出して、重役会の場にその

問題を出そう。そういう有力な外国の人が集まって、戦争をやめるようなことを考え、それを中国に話していこうという計画」を立てていたという。これが華興商業銀行の設立目的のひとつである。そしてこの計画の大まかな内容は「このときに中国側は総裁を出す。日本は戦争をしている当事者だから、宗像…が副総裁で行く。他の各国からも何人かの重役を出し、行員もそこから採ろう」というものであったという[76]。ところが、1939年4月ごろ宗像が華興商業銀行の「副総裁として行けない」事態になってしまった。しかしながら、この計画には軍が賛成していたため、軍が「日本銀行から人を出さないとけしからんといって叱って来た」。そのため日本銀行から他の人を役員として出さなくてはならないという事態になってしまった。このような事態のなかで、日本銀行の仕事として揚子江流域の経済調査として金融為替を担当していた岡崎に白羽の矢が立った。岡崎はちょうどその頃「日本銀行から揚子江流域の経済の調査を1年やって来いと言われて」日銀の仕事として揚子江流域の経済調査の金融為替担当をやっていた。そんなときに幸か不幸か岡崎は――先述した調査業務のため――ちょうど上海で仕事をしており、「あともう少しで任務は終わるころだった」ときに、上司から「君、行ってくれ」と言われたという。こうした事情から岡崎はまだ42歳という若い年齢でありながらも、どうしても重役にならなくてはならなかった。そのため岡崎は「こんな若いときから、勉強もしてないのに重役をするというのは僭越だから、もっと先輩をやって下さい」と言ったが、先輩に「今からでは無理だ、聞いてくれなきゃ困る、何でもかんでも行ってくれ」と言われたため、新設されることが決まった華興商業銀行に平重役で行くことになったのである[77]。

のちに岡崎は、自身の著書『中国問題への道』のなかで、このときの事情をつぎのように回顧している。

のちに蒙彊銀行の総裁になった、当時の日銀調査局長宗像久敬氏が軍の顧問で上海へ長くいっていたのですが、その人が、日支事変を解決するために、あそこに治外法権をもっている各国が共同して為替銀行をつくり、話し合う必要があるという考え方を持っていた。…宗像さんが…副総裁でいくことになっていた。

ところが、…ご本人が行かんと断ってしまった。…幸いおまえ上海にいるから、そのままそこへ行けといわれたのです。私はまだ 40 か 41 歳でしたから、日銀を出て重役なんかになるのは早すぎる、勘弁してくださいといったんですけれども、…どうしても行けというので、行ったら、それからずっとでした。

（岡崎嘉平太『中国問題への道』春秋社、1971 年、299 頁。）

こうして岡崎は、このような経緯で、華興商業銀行の平重役として上海に行くことになった。ところが、いざ岡崎が渡った当時の上海は――蒋介石政権の中華民国政府ではなく――日本が南京に樹立させた傀儡政権の中華民国維新政府であった。こうした事情から、中華民国維新政府は金を出してくれるが、他の諸外国は金を出してくれなかった。そのため、結局「日本と中国だけの合弁銀行」になってしまった。これがそのままになってしまったために日中の「国交回復や戦争停止の話をするチャンスは無かった[78]」ようである。このことは華興商業銀行設立を主導した宗像久敬の誤算であった。

【1-2：華興商業銀行勤務時代】

このような経緯で発足した華興商業銀行に勤めることになった岡崎であ

るが、華興商業銀行に行った日銀からの出向者のなかで「一番資格の高い者」がじつは岡崎であった。一方で年齢的に一番若かったのも岡崎であった。そのため、仕事をするのは岡崎が主としてやっていたという。

そのころの岡崎の家庭生活はどうだったのであろうか。岡崎は、華興商業銀行の勤務に当たり「長く東京を留守にする」ため家族とともに上海に渡った。そして、華興商業銀行を退職するまでの間、家族とともに上海で過ごした。岡崎は華興商業銀行勤務時代について自著『私の記録』のなかでも回顧している。岡崎は同書で、「華興商業銀行の頃」について、「日中合弁の華興商業銀行（上海）に勤めていた頃の思い出を幾つか書きとめて置きたい」と前置きしたうえで、華興商業銀行勤務時代の6つの「思い出」をつぎのように書きとめている。

1、華興商業銀行は、それまで日本軍の軍票に代わって、民衆からも信用されるような銀行券（華興券）を発行することも1つの業務であった。そのため発行金額に対していわゆる正貨準備を持つように努力し、当初は主として英ポンド、それに金、銀準備も逐次増やして行った。華興券に対する信用は簡単には高まらなかったが、預金もだんだん増加して、銀行経営は順調に伸びていったと思う。ところが上海方面の物価が激しく上昇し、ポンドの為替レートも急騰するので、預金の目減りも目立って来た。そこで私は、為替レートの上昇に見合って、預金額を銀行の負担で増加させる案を提案した。差当り2倍もしくは3倍に書き直す、ということである。

これに対して面白いという意見もあれば、前代未聞、乱暴なことだという反対論もあって仲々結論に手間取ったが、そうでもしないと華興券の信用維持は難しい点では意見が一致して、2倍にすることが決

定、実行された。

戦後わが国の物価が急騰する状況を眺めながら、当時を回想して、時々微苦笑することがあった。

2、上海にアメリカのクライスラー社の自動車を輸入する代理店に揚子公司というのがあった。クライスラー社のクレスという極東支配人が、上海にやって来た際、紹介されて面会し、華興商業銀行の信用状（それまでは横浜正金銀行の信用状）で取引をしてくれることを頼んだが、彼は華興商業銀行なんて信用できない、というから、私は外貨は十分に持っている。疑うなら紹介状を書くから、ロンドン、ニューヨークの正金支店に行って調べてくれ、万一わが銀行の信用状で支払いができないようなことがあったら、上海に来て、僕のこの首を切ってくれとまあ大変乱暴な交渉をした。ところが、クレス支配人どう思ったのか、よろしい、華興商業銀行の信用状を受け取ろうと承諾してくれたのである。

3、揚子公司の自動車輸入はその後専ら華興商業銀行の信用状でやるようになっていた。昭和 16 年（1941 年）の春、たしか 20 万ドルの信用状を発行した。しばらくすると揚子公司の近藤支配人がクライスラー社の電報をもって訪ねて来た。信用状を受け取ったが、もし注文を取り消す意思があるなら、今のうちなら応諾する、という趣旨の電報である。近藤氏が何でしょうか、どうしましょうか、というから私はあることを考えて、取り消さないと返事しなさいと答えておいた。私は突差に日本資産の凍結をやるんだな、と推察したのである。その後もデトロイトは発送したが、ロスアンジェルス船積前ならば取り消しに応ずる、という電報が入った。この時も、私は近藤支配人に取り消さない、という返電を出せと答えた。

資産凍結に違いないと判断したが、これを公言するわけにはゆかない。しかし放っておくと銀行の持っている米ドルが凍結されて経営が動かなくなる（英ポンド資産は昭和 14 年〔1939 年〕9 月欧州戦争勃発前、米ドルに乗り換えていた）と思ったので、予てから日本大蔵省が華興銀行の所有米ドルを売って欲しいと希望していたことを思い出し、急遽東京に出張して、米ドル全部を自由円に切り替えてもらった。

それから間もなく在米日本資産は凍結された。凍結直後、正金銀行上海支店に一時金条を貸してその急場を助けたのも思い出の 1 つである。この年（昭和 16 年〔1941 年〕）の 12 月日米開戦となった。

4、銀行では上海市街の北方、当時の五条カ辻、今の五角場の辺りに、4 平路を挟んで 2 つの大きな社宅を建てた。当時東洋一という人もあった位で、水も生水が飲める程深く掘って自家水道を作り、ガスも自家発生装置で供給した。社宅は内庭を 2 千坪ほどに広くとって子供の運動会ぐらいはできるようにした。

この社宅の地鎮祭は道教でやった。上海神社の神主を招いて、日本神式でやろうという事務局の提案であったが、銀行は日中合弁でもあり、また社宅には中国行員も入ることを慮って、地鎮祭は何のためにするのかと聞くと、悪魔を払うのだ、というから、中国の悪魔には日本の祝詞は判らぬから、逃げてくれないだろう、などと冗談を飛ばした思い出も懐かしい。

また日中事変の前途にも疑いを持っていたので、銀行は滅びても社宅は残る、と冗談のように言っていたが、事実はその通りになった。

5、銀行では南京はもちろん、徐州、蚌埠、蕪湖その他の要地にも支店を設けたが、金庫の扉が入手できないので、警備の不安が問題になった。そこで金庫は鉄筋コンクリートで防火を完全にすればよい。

もし強盗に襲われた場合には銀行券よりも人命を大切にせよ、という達しを出していたので評判がよかった。ただし強盗事件は 1 度もなかった。

また水質の悪い支店では大きな水の濾過装置を作って近所の家にも水を配った。

6、上海では有志と謀って時局研究をやっていたが、同人たちの基本的な考え方は、シナ事変の不当と、大東亜戦の無謀をいかにして是正するかで一致していた。シンガポール陥落後に、英国から講和の申し出があったという噂を聞いて、この機を逸らせず全面講和を計るべきだという結論に達し、これを政府に進言しようと、千葉成夫君（後、読売新聞論説委員、故人）が建白書の案文を書き、伊藤武雄君（満鉄）、杉村広蔵（上海商工会議所専務理事、元一橋大学教授）さんと私が署名人になって、時の内閣総理大臣東條英機宛に発送した。建白書は仲々の名文だった。敗戦で一切の書類が持ち帰れなかったので、今残っていないのは惜しい。

発送後しばらくは、いつ憲兵がやってくるかと、内心いささか穏やかではなかったが、真剣にやった若き日を懐かしく回想する。

（岡崎『私の記録』74-77 頁。）

以上 6 つに関して以下に簡潔に言及したい。

1 つめの項目にある華興商業銀行の業務内容に関して言及すると、華興商業銀行は、岡崎が述べるように「日本軍の軍票に代わって、民衆からも信用されるような銀行券（華興券）を発行すること」も主要業務のひとつであった。これは、先述したように、1938 年に興亜院が定めた「華興商業銀行設立要綱」のなかに「中支那ノ新事態ニ鑑ミ揚子江開放ニ対スル準備

ノ一トシテ又中支那通貨制度ニ対スル我方ノ援助竝指導ノ基礎ヲ樹立スル為自由ニ外貨兌換セラルベキ銀行券ヲ発行シテ外国貿易金融ヲ行フベキ銀行ヲ速ニ設立」するという方針が記されていることからも明らかである。

2つめの項目にある「上海にあるアメリカのクライスラー社の自動車を輸入する代理店」のエピソードを信じるならば、こうした岡崎の体験をみても明らかなように当時の華興商業銀行の信用状は少なくとも上海にある日本以外の外資系企業からの信用は著しく――この“著しく”をどの程度のレベルであると位置付けるかに関しては議論の余地はあるが、少なくとも岡崎が『私の記録』のなかで言及している「横浜正金銀行の信用状」と比べれば――低かったと推察される。それと同時に、岡崎が上海では日系以外の外資系企業とも華興商業銀行の信用状で取引ができるように尽力していたという岡崎の苦労が容易に想像できる。ここでの苦労があったからこそ、のちに上海日本大使館事務所に参事官として勤務したさいに、そこで、綿糸布の強制買い上げをおこなったり、経済政策をめぐって軍部とやりあったり、終戦前後の苦労や困難を乗り越えたりすることができたのではなかろうか。だから、上海日本大使館勤務時代を含めて、上海での苦労は少なからず、「難しい時を乗り越えられれば、将来を生き続けることができる」という、のちの岡崎の思想や哲学に影響を与えたと考えられる。さらに岡崎は、上海日本大使館事務所参事官勤務を含む、上海勤務時代にこうした苦労や困難を乗り越えてきたからこそ、のちに、池貝や丸善石油再建のさいにリストラのために労働組合と団体交渉をしたり、当時まだ国交がなかった中華人民共和国と民間貿易協定（LT貿易）の締結を実現させたり、座右の銘が「現在窮乏、将来有望」であることで知られる郷士の苦労人美土路昌一らとともに資金集めや資金繰りに苦労したり、「いくつかの不幸な出来事」などの逆境を乗り越えたりしながらANA（全日空）を

成長させることができたのではなかろうか。これらを言い換えれば、岡崎はこうした自身の経験をとおして、人間が「実力をつけるのは逆境の時」であり、「逆境こそ人間を作る」のであると考えるようになったのではあるまいか。これを裏付けるように岡崎は、ANA（全日空）相談役をつとめていた 1982 年に、『全日本空輸株式会社　社内報』の「“現在窮乏”から 30 年――当時の思い出」と題した「創立 30 周年記念特集」の対談のなかで、こうした苦労することや困難を克服することの重要性と必要性を、つぎのように説いている。

> 私は苦しい時の方が人間は進歩すると思う。困難を克服した経験のない人はとかく頼りない。…低成長の時こそ勉強の時であり、実力を身に付ける時です。ヘリコプターで山の頂上に降りても、それは登山とは言えない。一歩一歩登るところに登山の意味もあるのですね。今は富士山でいえば八合目、九合目だ。この胸突き八丁を登り切ってこそ新しい世界が開けるのです。
> （『社内報　全日本空輸株式会社　昭和 57 年』ANA、1982 年、18 頁。）

3 つめの項目は岡崎の先見性や先見力のよさを裏付けるようなエピソードである。はやい話が岡崎の勘の鋭さである。もちろん、この議論は“岡崎が述べることを信じるならば”という前提のもとに成り立っているという点に留意する必要があるし、立場によっては岡崎のこの主張に関するいくつかの反論があり得る。それでもなお、そうした反論を退けて、岡崎にこうした先見性や先見力・勘の鋭さがあったと考えられるのは、岡崎が日本銀行勤務時代に、ドイツ・ベルリンに駐在していたときにドイツの為替管理制度を調べたり、ドイツから帰国後に中国揚子江流域の経済調査とし

て金融為替を担当したりするなど、為替関係を学んでいたため、こうした学びが岡崎のこうした勘の鋭さを育ませたのではないかと推察できるからである。ただし岡崎の先見性や先見力のよさは、戦後、池貝鉄工や丸善石油（現、コスモ石油）の再建に携わったり、「航空事業は近代文明国家成立の基調をなすものである（日本ヘリコプター輸送「会社設立の目的」より）」という考えのもとに郷士の美土路昌一らとともにANA（全日空）の前身会社の設立と発展の礎を築いたり、日中LT貿易に携わったりするなど、他の分野においてもあらわれている。そのため岡崎の先見性や先見力のよさを以上のようにただ「為替関係を学んだ」からだという理由だけで説明するのはやや不十分であるという反論もじゅうぶんにあり得る

4つめの項目で紹介されている上海の華興商業銀行の社宅の地鎮祭を「中国行員も入ることを慮って」道教でやったというエピソードや、5つめの項目で紹介されている「もし強盗に襲われた場合には銀行券よりも人命を大切にせよ」という達しのエピソードや、「水質の悪い支店では大きな水の濾過装置を作って近所の家にも水を配った」というエピソードは、当時の岡崎が持っていただろう公に対する考え方が如実にあらわれている。ここでのこうした岡崎の態度は、まさに岡崎自身が信条とする「信はたて糸 愛はよこ糸…」あるいは「相手の身になって考える…」という言葉の実践であり、岡崎はまた、生涯をとおしてこうした信条を実践してきたからこそ「真心をもって人と付き合い、人々から信頼され尊敬された人」だと評されるようになったのではなかろうか。

6つめの項目で岡崎は「上海では有志と謀って時局研究をやっていたが、同人たちの基本的な考え方は、シナ事変の不当と、大東亜戦の無謀をいかにして是正するかで一致していた。…これを政府に進言しようと、…時の内閣総理大臣東条英機宛に発送した。建白書は仲々の名文だった。敗

戦で一切の書類が持ち帰れなかったので、今残っていないのは惜しい」と述べるが、このような建白書が残っていないのを惜しいと感じるのは、岡崎ばかりではない。この建白書の内容を本論文で扱うことができないことは残念としか言いようがない。

２．アジア太平洋戦争と上海日本大使館事務所勤務時代

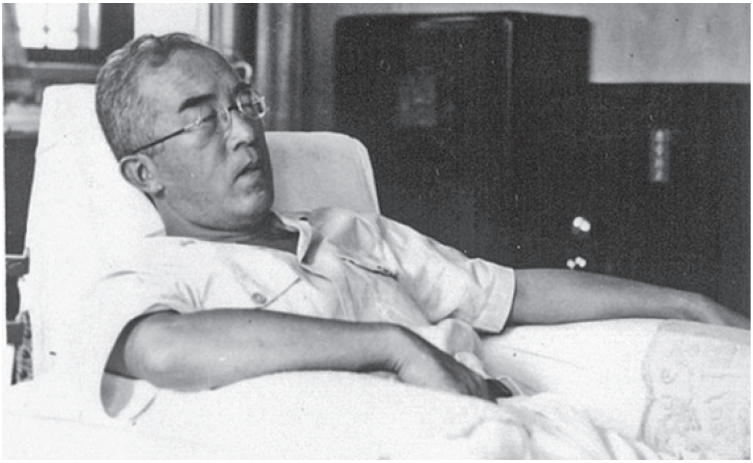
先に述べたように、上海での岡崎は、華興商業銀行の理事をする傍らで様々な公職を兼務していた。それは、アジア太平洋戦争開戦の 2 日後の 12 月 10 日に、在上海総領事より臨時総領事館事務を委託されるなど、アジア太平洋戦争開戦後も続いていた。岡崎は、アジア太平洋戦争が開戦してから数か月が過ぎた 1942 年 2 月 28 日、在上海総領事より、上海居留民団税調査委員を命じられる。同年 4 月 1 日、岡崎は、在上海総領事より、昭和 16 年度上海居留民団復興資金審査委員を嘱託される [79]。このように、華興商業銀行勤務時代から岡崎は公的な仕事にも携わっていた。そんななか 1942 年 11 月 1 日に拓務省・興亜院などが廃止されて新たに大東亜省官制が交付されると、岡崎は、大東亜省 [80] より、同日付で大東亜省参事官（高等官 2 等）大臣官房審議室勤務を命じられる [81]。それから岡崎は、同日（11 月 1 日）付で 3 年間ほど勤務した華興商業銀行を退職し、大東亜省参事官として東京に半年間ほど勤務する。

東京で大東亜省参事官として勤務していた岡崎は、1943 年 4 月 14 日、大東亜省より、今度は在中華民国上海日本大使館で参事官として勤務することを命じられる。また内閣より、高等官 2 等に敘せられる。ちなみに岡崎は同月に東京都大森区（現、大田区）に転居したばかりであった。

東京都大森区に転居して間もなく岡崎は上海大使館勤務のため華興商業銀行勤務時代以来再び上海に渡り、同年 5 月上旬、岡崎は上海に到着す

る。5 月 7 日、在上海大使館事務所総務部長になる[82]。それから 2 年後の 1945 年 8 月、岡崎は赴任先の上海にて日本の敗戦を迎える。

岡崎が大東亜省に入省したきっかけは、占領していた日本軍の蛮行を目



在上海日本大使館事務所にて（（公財）岡山県郷土文化財団所蔵）

在上海日本大使館事務所前にて、大使館参事官時代（（公財）岡山県郷土文化財団所蔵）

の当たりにした岡崎がのちに大東亜大臣になった青木一男に軍の蛮行を止めるように何回も進言していたことであるという。岡崎によれば、中国を占領していた日本の軍人たちが「極端に言えば苛める」など現地の中国人住民にたいして不利なことをしていたため、このような状況を目の当たりにした岡崎は、青木一男に「この戦争をやめるには、住民に不利なことをやっていたらやめられないから、軍のやることは止められなくても、住民には、迷惑を掛けないようなことをやらなくては駄目ですよ」と何回も進言していたという。そんななか、岡崎がちょうど上京していた 1942 年に大東亜省ができて「中国と東南アジアを含めてそういう問題は外務省から外して大東亜省でやるということになった」。そのため青木が岡崎に面会を求め、そして面会したさい岡崎は青木に「君が言っていたことをやるんだから大東亜省に入ってくれ」と言われたという。こうした事情から岡崎は、華興商業銀行を退職して大東亜省に入省し、大東亜省参事官になったのである[83]。

また岡崎が大東亜省参事官に就任して東京にもどることを「とうとう承知」したのは、先述した青木からの熱心なアプローチがあっただけでなく、当時大蔵省に勤務していた、岡崎にとって旧知である迫水久常からも勧められたという事情もあったようである[84]。ちなみに、迫水は、戦後に自由民主党所属の政治家となり郵政大臣などを歴任したが、山崎豊子の小説『不毛地帯』のなかで久松清蔵として描かれる迫水は、義兄である岡田貞外茂が海軍の航空機墜落事故で殉職したことが影響したためか、飛行機嫌いであったのが印象深い。これは、岡崎が岡山中学校時代に飛行機のことがよく書かれていた『日本少年』という実業之日本社が出している雑誌をよく読んで「（飛行機に）今の子供のように憧れ」、「それがどういう訳か、最後に飛行機会社の社長までやらされる」「運命」だった[85]というこ

とを考えれば、じつに対照的であった。

このようなかたちで華興商業銀行を退職した岡崎は、帰国後 11 月 1 日付で大東亜省に入省し参事官として大臣官房審議室に勤務し[86]、大東亜省参事官として東京で働きはじめてからおよそ半年が過ぎたある日、岡崎は「岡崎君、上海の大使館事務所に行って経済を立て直してくれ」と言われたため、上海にある日本大使館の参事官として、1943 年 5 月に再び中国上海に行くことになった[87]。

ところで岡崎が上海大使館事務所の参事官となったのは、中国に関して深い知識を持っていた外交官が少なかったことにくわえて、岡崎自身が中国について詳しかったという事情があったようである。そんな岡崎は上海日本大使館事務所の参事官として具体的にどのような仕事をしていたのだろうか。以下に岡崎の仕事をみてみたい。

【2-1：綿糸布強制買い上げ】

岡崎が大東亜省の参事官に就任して東京に戻っていたちょうどそのころ、上海地域では物価の暴騰がはじまっていた。これは「ミッドウェー海戦の完敗、ガダルカナル状況の不利などが伝えられた」ことによりアジア太平洋戦争において日本が圧倒的不利な状況に陥ったことが知られたためであると考えられる。1943 年ごろ、上海の紡績業者が製品を売らなくなった。これは中国や中国に進出している日本の紡績業者が値上がりを待つ目的で売るのをやめてしまったことが原因であり、事実、こうしたことにより不当に物価を釣り上げることによって利益を上げた工場もあったという（『岡崎嘉平太伝』193 頁）。

上海ではとくに綿糸布の囤積問題が大きく報道されていた。こうしたことから岡崎は、「上海でつくる綿糸布は奥地の民衆にはなくてはならぬ物

である、これが奥地に流れないと、奥地の物資も南京、上海地方に入ってこない。日本軍も困るだろうが、中国民衆の生活は大変なことになる。せっかく大東亜省ができて、対華新政策を打ち出しても、机上の空論になる」と思ったため、「これは大変なことになった」と心配していたようである（岡崎『私の記録』78 頁）。

当時の日本軍は、もともといわゆる「敵対封鎖」をやっていた。だが岡崎によると、「形としては奥地との物資の交流は絶たれていたが、実際には交流は行われていた」ようである。たとえば安徽省の北部の淮河の中流にある蚌埠という街にあった日本軍の特務部は物資調達の任務を担っていたが物資はなかなか集まらなかった。軍特務部は軍から早く物資を調達するように催促されるものの、もう「どうにもならない」という状況にまで陥っていた。このように行き詰っていたなか「とうとう」軍特務部の原田調査官が岡崎のもとを訪れて、岡崎に「どうしたら物資が集まるだろうか」という相談をしてきたようである。岡崎は、『私の記録』のなかで、軍特務部の原田調査官との相談で岡崎がアドバイスしたこととその後について、つぎのように振り返っている。

> …特務部の原田調査官がやって来て、どうしたら物資が集まるかという相談を持ちかけてきた。私は即座に淮河の航行禁止すなわち封鎖を解きなさい、というと、それは軍命令だからできないと彼は当惑顔、私は重ねて、物が欲しければ封鎖を解くこと、封鎖が大切なら物は諦めなさい、と強く言い放った。彼は蚌埠に帰って部長（桜庭予備役大佐だったと記憶している）を説いて封鎖解除を断行したようだ。2、3カ月後に桜庭部長が私を訪ねて来て、お蔭で物資が集まるようになり、心配していた治安もよくなった、と礼を言われた。これでも判る

ように、奥地との物流交換を絶つことは彼我共に損害をこうむることであった。ことに少しの余裕を持たない奥地の農民が、作った物は売れない、着る綿布は買えないとなると、その生活は一層惨めなものになったり日本に対する恨みはますます深くなってくる道理である。

（岡崎『私の記録』79 頁）

岡崎が『私の記録』のなかでこのように述べているように、当時はじっさいには「木綿類を奥地へ持って行き、その売上金で軍の必要なものを買っていた」という構造があったようである。しかし紡績業者が製品を売らなくなったことにより軍が「木綿類」を奥地に持って行くことができなくなれば、こうした構造が崩れてしまうため、日本軍は売り上げの減少によって「米などの必要なもの」が買えなくなるから困り、また中国の奥地の農民も日本軍が「木綿類」を売ってくれないから生活に困ってしまう（『岡崎嘉平太伝』193 頁）。

こうしたなか 1943 年 7 月のはじめごろに、5 月に上海に赴任して総務部長になったばかりの岡崎のもとに、軍から「綿糸布の囤積を何とかしてくれ」という要請がきた。岡崎によると、このとき事務所長の田尻愛義、経済部長でのちに商工次官となる奥田新三、総務課長増岡尚士、商工課長でのちに石油開発公団総裁となる徳永久次らが中心となって「いろいろ案を練った」が、誰も「これという名案」を思いつかなかったため、岡崎が「思い切った処置をしなければならぬと思って、中国側紡績会社には一部金で払うという案を提案」したら、「案としてはいいが、果たして政府が金を出してくれるかどうか疑問であった」ということではあったようだが、誰ひとり反対せず、「外部には秘して」、岡崎に任されたという（岡崎『私の記録』80 頁）。

そこで岡崎がまず考えたことは、「当時一般に、軍は他に頼んでおいても、半年結果が得られぬと勝手に変えてしまう、と言われていた」ため、「今度のことは途中で方針を変えられると大変になる」と思い、綿糸布の強制買い上げをすることに関して、軍の了承をとりつけることであった。岡崎は綿糸布の強制買い上げの了承を得るため、南京に駐在する日本大使と上海に駐屯する日本軍司令官、参謀長、経理部長、それから「その他関係のある担当官の人々」を上海のブロードウェイマンションに集めた。そしてその席で「軍から依頼された綿糸布囮積問題の処理について、われわれ大使館事務所では、これら綿糸布の強制買い上げをする方針であるが、簡単に成功するとは思われないのでかなり日時を要するかもしれぬ。そこでお願いしたいことは、…早急に成功しないからといって、…方針を変えるようなことはしないで欲しい。われわれは全力をあげて目的達成に努力する」と述べ、軍の了承をとりつけることができた（岡崎『私の記録』80-81 頁）。

なお、岡崎をはじめ「大使館事務所が考えた強制買い上げの大要」は、以下のとおりであった。

1、 買い上げは、日、中それぞれ買い上げ機関を作って責任をもって買い上げに当る。
2、 買い上げ値段は、価格暴騰直前の前年末の相場とする。
3、 中国側には半額は「金」、半額は儲備券で支払う。金の評価額も綿糸布と同じく前年末の相場とする。
4、 日本側には、日本銀行の登録国債をもって支払う。

（岡崎『私の記録』81 頁）

当時の汪兆銘傀儡政権である南京政府の最高顧問は、青木一男の後任にあたる、石渡荘太郎であった。そのため岡崎は、綿糸布の強制買い上げに関して事前に石渡と話し合おうと思って、石渡に会うために東京に行く前に南京に行った。岡崎によると、そのときの面会のさいに石渡は「綿糸布買い上げには同意」したが、「中国側に一部金で払うことには余り賛成はされなかった」ようである。岡崎はまたそのとき石渡に「岡崎君、戦争は紙でするものだよ」といわれた言葉が妙に岡崎の胸に応え、岡崎が『私の記録』を執筆していた当時においても時々思い起こしていたようである（岡崎『私の記録』81 頁）。

1943 年 7 月末、岡崎は当時大東亜大臣であった青木一男に会うために東京へ飛んだ。東京に着いた岡崎はさっそく、大東亜省があった虎ノ門の満鉄会館を訪れ、青木に会って「綿糸布の買い上げ」計画について「詳しく説明」した。岡崎はそのときの青木とのやりとりを「青木さんは綿密な方であったから、…覚悟していたのだが、ほとんど何もおっしゃらないで単刀直入、一言「で、金はいくらいるのか」と尋ねられた。…驚きながらも、私は…答えた。…大臣は「では用意させるから持って行け」と即決された。とても金は難しいと思って緊張していただけに、何となく拍子抜けがしたのは事実である」（岡崎『私の記録』81-82 頁）と振り返る。

上海にもどった岡崎は、8 月初旬に、さっそく「綿糸布買い上げ」の実務にとりかかった。そのさい「綿糸布買い上げ」の実務は「上海の紡績業界の事情を熟知してない役人だけでは成功し難い」と考えた岡崎は、豊田紡の塚本助太郎、内外棉の沢井、日華紡の谷口藤一郎、東棉の間瀬喜久雄、阿部一の辻川順助、伊藤忠の伊藤市平など、紡績業界の若手や商社から顧問になってもらうことにしたようである（岡崎『私の記録』82 頁）。以上のような経緯から、綿糸布の買い上げの実施がはじまった。

綿糸布の買い上げ実施は、先述したように、日本側と中国側がそれぞれ別々に実施機関を設けておこなった。また岡崎は、『私の記録』のなかで、そのさいの日本側の担当者は上海日本大使館の「増岡総務課長が主担当だったように記憶している」と述べている（82 頁）。なお、綿糸布買い上げの実施に入ってからは、岡崎は「実務にはほとんどタッチしなかったが、それでも多くの来訪者の応対などでかなり忙しかった」ようである。このように日本側の買い上げは「割合順調」に進んでいたようだが、一方で中国側の買い上げは「渋り勝ち」であまり順調に進んでいなかったようである。岡崎はこうした中国側の買い上げの状況をみて「いささか焦らざるを得なかった」と述べている（同書、82 頁）。

ところで、「大使館事務所が考えた強制買い上げの大要」の 4 項目に「日本側には、日本銀行の登録国債をもって支払う」とあるように、日本側の機関は日本銀行の登録国債によって綿糸布の買い上げをおこなっていた。登録国債は「日本銀行の帳面に金額を書き込んで、それで所有権が確定されることになる」という仕組みのものであった。しかしこうした登録国債による支払い方法に関して、岡崎は「お節介な長老」から文句を言われたようである。岡崎は、つぎのように回顧している。

> この支払方法について…日本の方はお節介な長老が出て来て、「国債証券にしてくれないか、そうすればこれを担保に銀行から金を借りられる。登録国債だと日本まで手紙を出して承諾書を貰わなければならないので時間が掛かる」などと、何回も不公平だと言って来たんですけどね。…「いや、もう日本にはそんないい紙はない。ペラペラの紙じゃあ困るでしょう」って言ったら、とうとう老人連中も諦め、一件落着ということになった。（『岡崎嘉平太伝』196-197 頁）

ちなみに、こうした綿糸布の買い上げ方法について文句を言ってきた「お節介な長老」のひとりが、在華紡の「長老」菱田逸次である。岡崎はとくに菱田から「激しい抗議をくり返し受けた」ようである。岡崎は菱田から何度もこうした「抗議」を受けたことに関して、『私の記録』のなかで、つぎのように振り返っている。

> 中国側だけに、半額とはいえ金で払うのは片手落ちである。かりにそれはやむを得ないにしても、日本側への支払いを登録国債にするとは、全く承知できぬ。せめて現物の国債証券を、現地で渡してもらいたい。そうすれば銀行の担保にも提供できる。登録国債では、手続きに長い日時を要して間に合わぬ、ときついお叱りを何度も受けたのであるが、私は当時、とても大量の証券を印刷する紙もあるまい、と思ってひたすら菱田老を、なだめたことであった。
>
> （岡崎『私の記録』83 頁。）

のちに岡崎は『私の記録』のなかで、「敗戦になると、…もしあの時、国債証券にして、上海で交付されていたら、国民政府に接取されていたであろう。登録国債にして、日本内地に残すことができたので、社員の退職金に充てることが可能になった。」「菱田老から感謝の言葉を聞いたのではないが、」「お陰です、と在華紡の人々からお礼を言われた」と、菱田からの執拗な「抗議」に屈せず日本側の機関が登録国債の発行によって綿糸布買い上げの実施をおこなったことの妥当性を強調している（岡崎『私の記録』83 頁）。

【2-2：金の引き渡し】

綿糸布買い上げのために上海に送って来た 20 万トンの金条は、岡崎によると、中国側の買い上げ数量が在庫量の約半分に留まったため、約 10 万トン残っていた。これは上海の横浜正金銀行の金庫（一部は南京）に預けてあったようである。ちなみにこの残りの金条約 10 万トンは、上海の分は登部隊から、軍の許可なくしては動かしてはならぬという軍命令が出て差し押さえられ、一時は司令部へ持って行かれたようである（岡崎『私の記録』91 頁）。

8 月上旬頃から、日本の敗戦が濃厚であると予感した上海日本大使館事務所では、このまま横浜正金銀行の金庫に預けておくと、中国国民政府軍またはアメリカ軍がやって来たとき、彼らによってこれらを没収されてしまうかもしれないという心配をしはじめた。また、だからといってこれらを「日本へ送り返すことは、当時の状況では全く不可能」であった。そのためこれをむしろ儲備銀行に譲渡して、儲備券の正貨準備としておけば、戦後補償問題が起きたさいによかろうと上海日本大使館サイドは考えていた。こうした経緯から上海日本大使館は、東京に電報をして、これを実行するための許可を求めていた。だが、東京が混乱していたと推察される状況下ではやはり返事はなかなか来なかった。そうしたことから岡崎が焦慮していたところに、8 月 13 日になってようやく「金を引き渡せ」という電報が来たとのちに岡崎は回顧する（岡崎『私の記録』91 頁）。

この金の引き渡しをめぐり、上海大使館事務所と軍との間で、激しい折衝がおこなわれたようである。岡崎によると、「登部隊には指示が来ないで、南京の総軍が情報をつかんで、登部隊に照会してきた」ことから、軍の笹井先任参謀に上海大使館事務所の大槻義公理財課長が呼ばれたようである。そしてそのとき、大槻にたいして、笹井が「これは作戦を妨害する

ものだ」といって食って掛かった。そのため、大槻はやむなく大使館事務所に帰ってその経緯を報告し、岡崎に軍を説得するように要請されたようである（岡崎『私の記録』91-92 頁）。

岡崎によると、岡崎と上海日本大使館は「金はどうしても中国側に渡しておかねばならない」と考え、議論していたようである。この議論をしていた終戦 3､4 日前の儲備券の発行残高は岡崎によると「まだ 2 兆円くらいだったが、急に増発される傾向にあった」ようである。そのため岡崎と上海大使館事務は「将来儲備券 100 対日本円 18 円の公式レートで補償を請求されたら、日本経済は破滅してしまうだろう、中国側に正式に渡しておけば没収されることはないし、また当時の金条相場から推算すると、儲備券は 100 パーセント金準備ということになるので、補償問題が起こらぬ」と一致して考えていた。こうしたことから岡崎は、「非常な決意をもって、何が何でも軍を説伏しよう」という強い意志をもって、その日の午後 4 時に笹井先任参謀に面会した（岡崎『私の記録』92 頁）。

ちなみに岡崎によると、岡崎は笹井先任参謀に面会するために上海大使館事務所を出る前にすでに南京日本大使館の一等書記官であった石黒四郎を呼び出し、「南京にある金をすぐに渡しておいてくれ」と伝えていたようである。岡崎はこのことに関して「大使館事務所を出る前、…石黒四郎一等書記官を呼び出し「…是が非でも承知してもらうから、南京にある金をすぐに渡しておいてくれ。時間がないからぜひ頼む。責任は私が持つ」と伝えた。…石黒君は何度も、大丈夫か、と聞き返したが、…石黒君も引き受けてくれたので、少しばかり安心して、軍司令部へ出掛けることができた。しかし、全く背水の陣であるという心境ではあった」と振り返っている（岡崎『私の記録』92 頁）。

岡崎は、経済担当の井上参謀も同席していた笹井との面会の場で、笹井

に金の引き渡しを要請した。しかし答えは先述した大槻の場合と同じであった。「なぜ渡さないのか」「どうしても渡されない」と同じことの押問答をくりかえしているうちに、笹井は「軍はこれからも戦争を続けるのだ、戦争をやるには物資が必要だ、それを調達するのに、今では儲備券では買えないから金で買うのだ」と言いだした。岡崎は「金で買うのだといったって、金条 1 本ずつ渡すやり方では買えない。金条を小さく切らねばならぬ、そんなことはできない、どうしても札を使わざるを得ないだろう。金を儲備銀行に渡しておいて、儲備券は 100 パーセント金で裏付けされていることを中国側で宣伝させて、儲備券を信用させた方が、物資の買い入れはスムーズにいく、札を使わずに戦争をしようというのは全く無理なことである……」と説得に努めた。だが、笹井は「容易にウンとは言わない」様子であったようである。しかし岡崎は、「軍も恐らく敗戦が近いと知っているに違いない」と察していた。そうしたことから岡崎が笹井に「井上参謀にはよく判らないのだ、東京から渡せといって来ている意味は私達にはよく判っている。だから参謀長（土居明夫中将）に話して意見を聞いてくれ、私が行ってもよろしい」と述べると、笹井は「岡崎参事官に行ってもらっては困る」といって井上と共に部屋を出て行き、2、30 分して帰って来るや「参謀長は、経済問題は岡崎参事官に任したらいいじゃないか、と言われるので、渡すことに同意します」と述べ、やっと承諾したのであった（岡崎『私の記録』92-93 頁）。

岡崎によると、この間「2 時間ほどかかった」ようである。まさに粘り勝ちであった。またそうでなくとも岡崎はもともと笹井から承認を貰うまではずっと粘るつもりでいたようである。それをあらわすエピソードの 1 つが面会（承認取付）後の笹井とのやりとりである。岡崎は、面会（承認取付）後の笹井とのやりとりについて「笹井先任参謀が、「岡崎さん、今

日は実によくねばりましたね」というから、「私は何時間でもねばるつもりだった。もし聞かれなければ、ここに泊まるつもりで来ていたんだから」と答え、双方笑いながら別れた」（岡崎『私の記録』93 頁）と振り返っている。

こうして笹井と直接面会をして金引渡しの承認を取り付けて上海日本大使館事務所に帰った岡崎は、大槻課長などに「金引渡し承認」の件を報告して、「喜びを分かち合いつつも急ぎ引き渡しの手配をして、やっと落ち着きを取り戻した」ようである[88]。

だが翌日 8 月 14 日になって、大槻から「軍の指図で、もう少し金を残してある」ということを聞かされた。そのため、岡崎はすぐさま「それはいかん、すぐ全部渡してくれ」と応答して、急ぎその日（8 月 14 日）の夕方に金を引き渡してもらった。そして、その翌日に日本はアジア太平洋戦争に敗戦した。「危機一髪」とはまさにこのことであった。このことに関して岡崎は、『私の記録』のなかで、「金を中国側に、きわどいながらも機を失わずに、引き渡し得たことは、ほんとによかった、と後でしみじみ感を深くした。…誠に危機一髪とは、こんなことを言うのであろう」（岡崎『私の記録』94 頁）と振り返っている。

【2-3：上海での生活】

そんな大東亜省参事官と上海大使館事務所参事官時代の岡崎は上海でどのような暮らしをしていたのであろうか。

岡崎は大東亜省参事官に就任したとき、家族を上海に残して一人で東京に戻ってきた。しかし岡崎の家族が上海から帰国した頃、今度は岡崎自身が上海大使館事務所の参事官として再び上海で勤務することになってしまったため、家族と行き違いで上海に渡ったようである。家族と行き違い

で上海に渡った岡崎は、上海到着後、上海日本大使館参事官として敗戦までその職責をまっとうした。

大使館職員たちと軍人たちとでは、同じ戦争を遂行していくなかでも、最終的に目指す方向が異なることから、とくに経済政策をめぐって、しばしば対立が生じていただろうことは容易に想像できる。日中戦争の早期終結を望む人々の考え方とそれを望まないどころかさらに戦争継続を望むような人々の考え方は氷炭相容れない関係にあるため、両者が互いの考え方を受容することは到底できないということが予想される。こうした状況のなか岡崎が参事官として勤務した上海の日本大使館事務所では、数人ほどの軍人と、その他、各省から派遣されてきた職員や、現地で雇われた職員など、だいたい 50 ～ 60 人が働いていた。岡崎は、そんな氷炭相容れないであろう大使館員たちと軍人たちとの関係を、大使館員たちは軍人たちのことを「口には出さないけれども、あまり相手にしない」し、軍人たちも大使館員たちのことをそっちのけで「戦地に行きたいと思っていた」様子であったと推察している [89]。

また、岡崎によると、大使館勤務の軍人たちのなかでも司令官と参謀は「非常に立派な人だった」ため「その面では非常に旨く進む」が、反面、実務をやっている少佐や中佐の多くは「わがままをやっていた」という。ただし、敗戦が近づき「日本が負けるようになってからは、あまり中国人を困らせるようなこと」はしないようになったという [90]。

そんな軍人たちと岡崎を含む大使館員との間には、経済政策などでしばしば政策対立が生じていた。そのなかでも岡崎がもっとも対立したひとりが当時南京総軍の大佐だった辻政信であった。

岡崎は、「辻政信大佐は、南京総軍なんですが、「後方担当」の第 4 課長なんで、経済を抑えてますからね、それで方針が違うことがあるんです」

（『岡崎嘉平太伝』198-199 頁）と当時を振り返る。

ところで、岡崎が上海にいたころ、上海で生活する日本人コミュニティーの間では「老上海」という言葉が流行っていたようである。岡崎によると、この「老上海」という言葉は、「日本人で中国に長く居た長老」を「老上海」ということで日本人だけが使っていたという。また「中国人のことをよく知っている人だとか、上海に馴染みの深い人という意味で「老上海」という」らしい。「老上海」として一番有名だったのが、上海で内山書店という本屋を経営していたクリスチャン[91]の内山完造であったと岡崎はいう。

ここで内山完造について簡潔に述べる。内山は、現在の岡山県である備中出身であるため、岡崎とは同郷の間柄である。そのような縁もあってか上海勤務時代に岡崎はしばしば内山が経営する内山書店に通っていたようである。岡崎は当時の内山に関して「（内山）完造さんは本当に中国が好きだった人です」「中国人の中で生きていた日本人です」と述べている。そんな「中国が大好きだった」内山であったが、日本の敗戦直後、内山自身は上海政府警察当局によって監禁・強制帰国させられ、内山書店の本も最終的には中国当局によって全部没収（摂取）されてしまった。内山はこのことに関して、自身の上海での生活を綴った著書『そんへえ・おおへえ』のなかで、つぎのように回顧している。

> 私は…、上海政府警察局行政署日僑股によつて監禁されて、そのまま強制帰国せしめられたのであるが、その時約二万冊近い日本書籍を持つておつた。この日本書籍の処分には実は非常な関心を持つた、と云ふのは親友の信頼を受けて預かつた物も多かつたからである。帰国後聞く話ではどうやらめちやめちやになつた様で、甚だ残念に思うて

をつた…。

（内山完造『そんへえ・おおへえ』岩波新書、昭和 24 年、33 頁）

しかしながらそれでもなお「中国人」や「中国」への思いを持ち続けた内山は、中華人民共和国が建国された翌年（1950 年）の 10 月に「日中両国民の相互理解と友好を深め、文化交流を図ること」などを目的とした日中友好協会が設立されたさい、その初代理事長に就任したことでまた「日中友好」という文脈のなかで中国とのかかわりを持つこととなった。ここに内山と中国との絆は再び結ばれた。

【2-4：敗戦を予期】

岡崎によると上海方面の陸海軍の首脳部は 1945 年春頃から日本の敗戦を予期していたようである。上海方面の陸海軍の首脳部は「表面では相変わらず強さを装っていた」ようではあるが、一方で「終戦に備えるためと思われる方策も準備」していたようである。岡崎によると、陸海軍の申し合わせによって設けられた「政経部」もそうした「終戦に備えるためと思われる方策」の 1 つであった（岡崎『私の記録』50 頁）。

1945 年 6 月のはじめごろのある日、登部隊の土居参謀長が突然岡崎に会いに来て、岡崎に「従来上海方面における政治（主として中国側との折衝のことのように受け取られた）と経済は陸軍と海軍とが別々にやっていたが、これを統一してやることにし、その主機関として『政経部』を設けることにした。ついては、その部長を岡崎参事官に引き受けてもらいたい」という話を持ちかけた。岡崎は当初「土田公司がこれを承知しているのか、どうかは判らなかったけれども」この話を「即座に」断った。これは岡崎が「そんな大役が果たせるはずはない」と思ったことにくわえて、

「今頃になって、陸、海の協力ではすでに遅きに失しているではないか、という不満」から納得していなかったということもあったようである。しかし岡崎は土居参謀長にしきりに頼まれたこともあり、遅いにしても陸海軍が協力しなければ事態の収拾ができないと岡崎は考え、「土居参謀長が部長を引き受けるならば、その代行を引き受けよう」ということで承諾した（同書、50-51 頁）。

そのころ日本国内では陸軍統制派出身の東條英機内閣のもとで「下方平準化」が進んでいた。それは、井上寿一『日中戦争下の日本』（講談社選書メチエ、2007 年）が明らかにしているように、本来ならば戦争を反対すべきであるはずの女性・農民・労働者のような「持たざる者」である下流階層が、戦争が泥沼化していくなかで「下方平準化」を期待して超国家主義者などの侵略戦争（アジア太平洋戦争）の推進勢力を支持し戦争の継続を支持したにすぎない。こうした「下方平準化」の行きつく先は「国民全員が苦しみ続ける平等」な社会である。井上はこのことに関して、「下方平準化の徹底は、もはや下流階層の開放感をもたらすことがなかった。国民全体が最底辺の経済生活に突き落とされた」（同書、186 頁）と述べている。こうした「下方平準化」が行きついた先の「国民全員が苦しみ続ける平等」な社会の国民生活の状況は、山田風太郎の『戦中派不戦日記』のなかでも記されている。山田はこうした国民生活の状況を、「国民はみずからその首をしめ、自ら頬を打つ」と巧みにあらわしたうえで、つぎのように記している。

> 運送人夫は半時間のリヤカーに三十円とる。運ばれたる砂糖一貫目は千円にて売らる。買いたる人はさらにこの砂糖を以って暴利をむさぼらんとす。途方もなき値で肥料を求めたる百姓は途方もなき値で米

を売る。ばかばかしき闇値で材料を仕入れた工場はばかばかしき闇値で製品を売る。かくして物価は鰻上りに上がり、貨幣価値は腹下りに下がる。みずからあえぎ、みずからもだえつつ、国民はみずから如何ともする能わず。（山田風太郎『新装版　戦中派不戦日記』講談社文庫、2002 年、87 頁）

「神の国」日本の国内は、山田が記すように、このように、もはや「モラルの焦土」と化していたのである。そして、こうした国内事情から推察すれば、同時代においても――「神の国」神話なる空虚な日本主義のフィクションを信じ込んで日本の敗戦を考えないという思想の持ち主でない限り――日本の敗戦が間近であることを予感するのは容易であったかもわからない。上海にいた岡崎もまたこうしたことを理解したうえで、日本がこれ以上「戦争は出来ないんだという感じを持っていました」と、日本の敗戦を予感していたようである。

事実、先述したように、岡崎と上海日本大使館事務所は、8 月上旬頃から、日本の敗戦が濃厚であると予感していたため、岡崎は「危機一髪」で敗戦前日（1945 年 8 月 14 日）までに金の引渡しをおこなうことができていた。だが日本の敗戦が濃厚とはいえ現実問題として上海にいる 10 万人ほどの日本人居留民たちをどうするかという問題を抱えていた。

1945 年 7 月頃になると大使館事務所のなかでも課長大槻義公、課員橋本正治郎、有保昇などをはじめとする財務課を中心に「居留民の不安を除くため、日本送金を緩めよう」という議論がおこなわれていた。彼らの意見は「万一日本敗戦となったら、居留民は日本に引揚げることになるが、その時は多額の資金を携行することは許されていないであろうから、引揚後の生活について大きな不安を抱くと、上海で何が起こるか判らない」と

いうものであった。具体的には「自殺する者が出るかも知れぬ。…乱暴を働く者も出ないとは言えない。その果てが居留民の大混乱となっては大変である」ということを危惧していた。そして「それを未然に防ぐには、儲備券を日本円にして、日本に送金させておくのが差し当たっての最良策だ」と彼らは考え、こうした意見を東京に具陳していたようである。7 月末頃、「日本円対儲備券の比率を 1 対 70 で送金してよろしい」という指令が中央からきた。岡崎によると「それまでは、公式には 1 対 18 であったが、この比率での送金は事実上取り扱われていなかったようである。送金額に制限があったように思うが確かな記憶はない」という。それから岡崎は「この比率は後になって、もっと厳しくなったと記憶している」とも述べている。そして岡崎はこうした通貨・為替政策をつぎのように評価している。

> これは確かに善政であった。しかし万一の場合日本に帰って、仕事をし、生活をしようと思えば､5 万円や 10 万円の金では足りない。100 万、1000 万となると、儲備券の額にしたら 7 千万元、7 億元という巨額である。月給取りには 5 万円の送金も難しかったが、民間業者では送金した者もあったようで、人心安定という目的は部分的ながら達せられたように思う。（岡崎『私の記録』52-53 頁）

岡崎をはじめ上海日本大使館は、金の引渡し問題などの案件を処理する傍らで、それと並行するかたちで、上海にいる多くの日本人居留民たちを預かる立場として、どのようなかたちで戦争を終わらせるのか、あるいはどのようにして敗戦処理をするのか、そしてそうした類の情報をどのようにして判断すればよいのか、を現実問題として考えなければならないとい

う難問に直面していた。そのため岡崎たちは「大体そういうことを割合勉強していた」という。のちに岡崎は、「終戦を予感」しはじめた当時の状況を「それはもう、戦争は出来ないんだという感じを持っていましたから、大体そういうことを割合勉強していたんですよ。…だから、戦争はもうそんなにも続けられないと我々は思っていました。それで、戦争をやめれば天皇陛下のお言葉が出るに違いないから、それに従ってやろうじゃないかというのを…会議で話したことがありますよ」（『岡崎嘉平太伝』204-206 頁。）と振り返っている。

【2-5：日本敗戦の詔勅】

岡崎によると、戦争末期の上海では、陸軍、海軍と上海日本大使館事務所との間で「連絡会議」というものを持っていたようである。なおこの「連絡会議」には、軍からは主として、陸海軍の参謀長、陸軍部長、海軍部長が出席し、大使館からは岡崎が出席していた[92]。

日本本土では、アメリカ軍による無差別空爆や、8 月 6 日に広島に、そして 9 日に長崎に原爆が落とされ多くの人々が犠牲になった。こうしたなか中国戦線でも長崎に原爆が落とされた同日、8 月 9 日にソ連が満州に進出してくると、戦局は急激に変化した。

岡崎の記憶によると、「たしか（8 月）11 日に登部隊司令部に陸軍の参謀長、先任参謀、陸海軍部長その他、大使館事務所からは私（岡崎）が出席して緊急協議をした」さい、いろいろ協議した後で、岡崎は「残念ながら日本の敗戦はもはや必至のように思われる。その場合には、おそらく天皇陛下のご詔勅が発せられると思う。軍としては堪え難いことではあろうが、ご詔勅に示されるところにしたがって行動してもらいたい。もし上海方面の軍が無傷だからといって、暴れるようなことでもあると、5 万の上

海居留民の安全は、保障できなくなるし、延いては、全中国にいる日本人にも及ぶだろうから、耐え忍んでもらいたい」という趣旨のことを述べたという。そして、岡崎の話にたいして「誰 1 人反対する者はいなかった」ため、岡崎は「一先ず安心と胸をなで下ろして」上海日本大使館事務所に帰ったという[93]。

ところが岡崎が上海日本大使館事務所に帰って間もなく艦隊司令部から「急いできてくれ」という電話がかかってきたため、岡崎は連絡会議に駆けつけた。すると連絡会議に先に集まっていた陸海軍の参謀がいて「岡崎参事官は先程、日本は負けるといったが、今接受した阿南陸軍大臣からの電報によると、軍の方針に変更なし、各員一層動力せよという趣旨が明確に記されている。したがってさきの連絡会議でご詔勅にしたがって行動するという約束は自然消滅した。参事官、君はどうするのだ。特攻隊は発進準備を整え、指令を出るのを今かと待っている。即刻返答して貰いたい」と岡崎に激しく迫ってきた。岡崎は案外落ち着いて「その電報はいつ、どこから発信されたのか」と問い返した。しかし、「東京から総軍（南京）に来た電報の転電だから、それは判らぬ」という返事しか返ってこなかった。岡崎は「終戦間違いなし」と思ってはいたが、この「不可解な電報」を前にしては反論の術がなかったため、「私にはどうも合点がゆかぬが、これが陸軍大臣の指令であるならばやむを得まい。軍の判断にお任せしましょう」といって再び上海日本大使館事務所に帰った[94]。

そのころ上海のイギリス租界、フランス租界を岡崎が自動車で通っていると、中国人が岡崎に向かって何かをわめいたり、ときには唾を吐きかける所作をしたりするのも目立って多くなってきたため、岡崎は「多分中国人の間では日本敗戦を知っていたのであろう」と実感したようである。また上海で日本軍が応援して発行していた新甲報の主筆の陳彬龢が岡崎のも

とを訪ねてきて「日本は降伏するらしい。岡崎先生がそれを確認したときには、知らせて欲しい」と頼んできた。岡崎は日本敗戦を事前に確認することができなかったので返事せずに放置していたら、8 月 13 日の夕方に鉛筆で走り書きした長い手紙がきて「自分は北方へ行く、そして共産軍にいる傅作義将軍のところに身を寄せる。日本は今後中国共産党の動きに留意しなければならない」と岡崎に注意してくれたという。ちなみに岡崎によると、陳は戦後間もなく日本に来て、日本で死んだようである [95]。

なお岡崎は、「§2-2：金の引き渡し」で述べたように、8 月 13 日に金引渡しの承認を取り付けるため、笹井と直接面会していた。そして「金引渡し承認」を取り付けた岡崎は上海日本大使館事務所に戻り大槻課長などに報告して、「喜びを分かち合いつつも急ぎ引き渡しの手配をして、やっと落ち着きを取り戻した」。だが翌日 8 月 14 日になって、大槻から「軍の指図で、もう少し金を残してある」ということを聞かされたため、岡崎は夕方に金を引き渡してもらった。そんな出来事があった同日（8 月 14 日）、上海日本大使館に「明日 15 日、未曾有の放送あり、全国民挙って静粛かつ謹厳にこれを聴取すべし」という同盟電報が入った。報道部から知らせを受けた岡崎はじめ大使館職員は「何だろうかと評議した結果、これは天皇陛下の降伏のご詔勅ではあるまい――当時 “ 終戦 ” という字句は思いつかなかった――全居留民の注意を引くように、明朝の大陸新聞に枠入りで電文をそのまま掲載することを決めた」という。しかし、結局、翌朝の新聞にはとうとう掲載されなかった。岡崎はこの理由を、そのころは陸軍・海軍・大使館の 3 つに分かれていた日本側の情報業務を大使館の情報部（松平忠久部長）に統一していたが陸軍情報班から掲載に反対するきつい抗議があったため、「陸軍の情報班が実力で阻止したものと思われる」と考えているようである [96]。

敗戦前夜の 8 月 14 日の夕方の上海日本大使館では、暗号で敗戦を知らせる「詔勅の電報」が入りはじめていた。岡崎は「その初めの方の訳文で」それが日本の敗戦を知らせる詔勅であるということを確認した。そして「それを確認すると、すぐ土居参謀長に電話でそのことを知らせておき、11 時頃それまでに訳し終わった詔勅を持って、これから司令部を訪問したいと申し入れたら、道々に兵隊を立たせておくから、という承諾があった」（『私の記録』56 頁）。

岡崎は、土居に「訳し終わった詔勅」を見せるため、人通りが少なくなった夜の上海の租界を車で走るなか、「町の各角々に日本兵が立っている」風景をみてこう感じた。「その影は何となく淋しく見える。気の毒なのは兵隊さん、という気がしてならなかった」[97]。

岡崎が土居のいる司令部に着いたとき、土居も起きて岡崎を待っていた。岡崎は土居に「訳し終わった詔勅」の電文を見せた。そして岡崎は土居に真剣にこう頼んだ。「全部の訳文が入り訳し終わるのは夜明け頃になる見込みである。全文訳了したら、また持って来るが、決して軍に動揺のないようにしてもらいたい。また、参謀長や、松井司令官が責任を取るといって自刃でもされるようなことがあると、大変なことになるので、それこそ難きを忍んで大局を全うしていただかなくてはならぬ」。

それから岡崎はまた上海日本大使館事務所に戻った。そして岡崎は大使館事務所で次々とできた訳文を読んでいった。夜半過ぎ、岡崎は「しばらく仮眠をしたが、情報部員は徹夜で受信、暗号解読に努力した」[98]。

こうしたなか岡崎は中国上海で 1945 年 8 月 15 日、日本の敗戦の日を迎えた。

敗戦の日の朝、「まだ東の空が白みかけない頃、全文の訳は終わった」。しかし「五体為めに裂く」という箇所が「どうしても解読でき」なかった[99]。

あたりが「薄明になった頃」、岡崎は、「急いで書いてもらった詔勅の全文」を土居に渡すため、「軍司令部に車を飛ばした」。軍司令部に着いた岡崎は、土居にそれを手渡し、土居の顔色を窺った。そしてそれを読んだ土居は岡崎にたいしてつぎのように述懐した。「（岡崎君）ありがとう。私にも、陛下のご放送を聞け、という電報が来た。君（岡崎）の昨夜の言葉は、直ぐ松井司令官に伝えた。司令官も同意された。…ここで死ぬよりも、日本が再び過ちをしないために、敗戦の原因を徹底的に究明するまでは恥を忍んで生きることにする。またこのご詔勅の全文があれば若い者も納得してくれるであろう。だが昨夜から今朝にかけて若い士官たちが掛けて来て…説得に骨が折れた」（岡崎『私の記録』57 頁）。

岡崎にとって敗戦の日は特別な日であった。岡崎は敗戦の日を「この 1 日のことは、今でも昨日のことのように、私の脳裏に強く印象されている」（岡崎『私の記録』57 頁）と回顧する。岡崎はこの日の正午に敗戦を知らせる「玉音放送」を聞いたときのことをつぎのように述懐する。「15 日の正午には、大使館事務所の者は一堂に集まって、それこそ、静粛かつ謹厳にラジオに耳を傾けたのである。…大使館事務所の者は、皆少し前から薄々敗戦を予感していたので動揺は見られなかった。…居留民の動揺は直ぐには掴めなかったが、親子何代にも渡って上海に住み、上海を故郷としている人たちは案外冷静であったようである。満州事変、第一次、第二次上海事変などを耐え抜いて来、また多くの親しい中国人の友人を持っていて、中国人に対して深い信頼感があったからであろうと思う」[100]。岡崎が「親子何代にも渡って上海に住み、上海を故郷としている人たち」が「案外冷静だった」という理由を「（彼らは）多くの親しい中国人の友人を持っていて、中国人に対して深い信頼感があった」ためだと考えるのは、いかにも岡崎らしい発想である。なぜならこれは、先述したように、青春

期に中国人留学生と出会って形成された岡崎の中国観が反映されていると考えられるからである。

いずれにせよ 8 月 15 日の「玉音放送」とともに日中戦争とアジア太平洋戦争は終結した。

そんな日本の戦争の“終わり”は、岡崎の上海での敗戦処理の仕事の“はじまり”でもあった。岡崎は今後、「難しい時を乗り越えられれば、将来を生き続けることができる」という言葉を信じて、上海で敗戦処理の事務仕事にあたることとなった。

３．上海での敗戦処理の事務仕事

岡崎が上海在日本大使館事務所参事官として働きはじめてから 2 年程経った 1945 年 8 月 15 日、日本はアジア太平洋戦争に敗戦し、岡崎は上海の地で敗戦を迎えた。

同日、中華民国の元国家元首、蒋介石は「徳を以て怨に報ゆる」演説として有名な「わが中国の同胞は「旧悪を思わず」「人のために善を為せ」という教えは、実にわが民族の伝統的な高至貴の徳性であることを知らなければならない。われわれは一貫して、正義に背いて戦いをはじめた日本の軍閥を敵として、日本人民を敵としない声明をしてきた。…（日本）人民に対しては決して汚辱を加えてはならない」という「余の対日方針（われの対日方針）」と題した声明を「全国軍民および世界人士」に向けておこなった[101]。しかしながら敗戦まで中国で中国人に対して「悪いことをしていた」という罪悪感から報復を恐れる日本人居留民たちも少なくなかった。

岡崎によると、敗戦から数日が過ぎた 9 月上旬末に湯恩伯上将が上海地区接収司令官として上海に来るまでの間、在上海日本人居留民たちの多く

は不安の毎日を過ごしていたようである。もっとも、先述した内山完造などの、上海に長く住みついていた「老上海」たちの多くは、「親しい中国の友人も多く、…案外落ち着いていて、敗戦の動揺といったものはほとんどなかった」ようである。だが「忠義軍とかいう顧祝同将軍の部隊が浦東方面に入って来て、物資の徴発をやっているという噂が流れだすと、危険を身近に感じはじめていた」というのもまた事実である。また「アメリカ軍も入ってくると、婦女子の誘拐事件も起こって、不安は段々高まってきた」と岡崎は指摘する。さらに、それにくわえて「物価も急上昇し出して、貯えのない者、収入の道のない者は、持物を闇市に売って凌ぎ、中には、道端に並べて売る者さえ現れる状態になって、私も敗戦国民の惨めさを身体で感じるようになっていった」と岡崎は述懐する[102]。このように、敗戦直後の上海は、敗戦直後の日本本土同様にもはや「モラルの焦土」と化していたのである。

そのころ上海日本大使館事務所では、参事官の佐藤信太郎を中心に、日本に帰還するまでの生活方針をたてた。具体的には、今までの官等別俸給制を全廃して、1 人一律月 3 万元に均等配分し、そのうえで家族がいる職員には、大人、子供 1 人ごとに一定額を加給することと決めた。そして、その資金の調達方は佐藤に一任された[103]。岡崎は佐藤のこの方針を「この決定は大変良かったと思う」と振り返り、さらに、「佐藤参事官がどんな方法で資金を作られたかは、話されもしないし、聞きもしなかったのだが、あの混乱時に、よくやっていただいて、少しの動揺も起こさなかった彼の隠れた功績は、今でも深く感謝している」と評価する[104]。

こうしたなか、敗戦からおよそ 1 カ月後の 9 月半ばごろ、上海地区の接収のために、中国側の将軍湯恩伯が重慶からやってきた。

湯恩伯は「士官学校の出身である上に、勇敢であるとともに清廉な将軍

であることが、日本の軍人の間にも、知られていた」ため、岡崎は「湯恩伯将軍が正式に接収司令官に任命されたという報道」を聴き、「全く救われたという安心感でほっとした」[105]。

敗戦直後の上海は、湯恩伯が上海に来る前から、日本の工場で働いていた中国人労働者の退職手当の要求が起きていた。だが日本側工場は支払賃金の調達ができないため、「段々険悪な様相を呈して来ていた」[106]。岡崎によると、こうした情勢のなか「軍も、総領事も処置できなくて、とうとう大使館事務所に押しかけてくるようになった」ようである。

岡崎は「敗戦という特別な事態の中で…やむを得ず、何とか最悪の事態を避けるために努力してみよう」（『私の記録』21-22 頁）という志から、この対応の実務にあたった。ところが、上海日本大使館事務所に「金がないのだから、何ともならない」。そのようなときに、敗戦の年の 9 月半ばに、湯恩伯が上海に乗り込んできた。湯恩伯は「それまで日本の登部隊が司令部にしていた」グローブナーハウスに入った。岡崎は「湯将軍に訴える外ない」と心に決めて、「松井太久郎司令官の通訳をしていて、すでに湯将軍とも面識のある村辺繁一さんに同道を願って」、ある日の夜、湯への面会を求めた[107]。

そして翌日、岡崎は湯と面会するため、待ち合わせ時間ちょうどに陸戦隊に出向いた。すると、「待ち受けていたアメリカ風の装備をした学生と思われるようなキビキビした」若い兵士に誘導され司令官が待つ応接間に入った。そこで腰を沈めた「1 人の赤ら顔の老人」が待ち受けていた。彼こそがまさに湯恩伯であった[108]。

中将は湯恩伯ひとりしかいないので、岡崎が「岡崎参事官です」というと、湯は「湯恩伯です、どうぞお掛けなさい」と言い、それから岡崎はつぎの 2 つの用件を話した。

1 つは、「退職金を払おうにも金が作れない（日本人所有物資の移動禁止令が出ていた）ので物資処分を一部認めて欲しい」というものである。そしてもう 1 つは、「退職金支払いが遅れた場合にも暴動などにならぬよう配慮して欲しい」、というものである。岡崎は湯にこの 2 つのことを頼んだ。すると湯は「2 つとも適当に処理しよう」、と「即座に快諾してくれた」ようである [109]。

ところで、この面会後、岡崎が「やれやれと重荷をおろした思いで」辞去しようと立ち上がると、湯が岡崎に「ちょっとお待ちなさい、いい機会だから少し話をしよう」と言ってきた。そのため岡崎は、「何事だろう、と胸をどきどきさせながら」、湯とまた会話した。岡崎によると、そのさいの湯の話を要約するとつぎのようなことであるという。「日本は日清戦争以来、わが国を随分いじめた。これにはわが国としては非常な恨みがあるのだけれども、今更そんなことを言っても始まらない。これからは、もう戦争はやめましょう。そしてお互いに手を握ってアジアを良くしましょう。これは蔣主席の考えでもあるから、岡崎先生もこれに協力して下さい」。湯からこのように話された岡崎は「大変驚き感激」したようである。そして岡崎は、「私は若いときから、日本と中国とは協力してまずアジア諸国の独立をかちとらなければならぬ、と考えていた者ですから、将軍のお言葉には大変胸を打たれました。おっしゃられるまでもなく私も微力を尽くしましょう」と湯に返答したと述懐する [110]。

10 月のある日、岡崎は湯に呼ばれ、「1、中国にある日本民間人の所有物資は、戦時賠償に充てるのであるから、中国の正統政府すなわち国民政府に渡して欲しい。」「2、そのように接収ができると、その外には日本に対し賠償の請求はしないことになっている。このことを岡崎先生から日本の居留民によく伝えてもらいたい」という 2 点の言渡しを“厳重に”受け

た。岡崎によると「このことは間もなく湯指令部の総務（？）主任だった胡（静如？）少将からも説明と要請を受けた」という。具体的にはつぎの3つである。「1、日本の民間物資は賠償に充てるのだから、日本の民間人もきれいに出して欲しい。」「2、接収は今後産業処理局…が行う。もし処理局以外の者に引き渡したことが判るとそれは没収して、賠償の中には入れない。」「3、もし手続きを踏まずに接収に来る者があったら、手続きを踏むように話し、それを聞かぬ者があったら、すぐ届けてほしい」（岡崎嘉平太『私の記録』64-65頁）。

岡崎は、「満州事変以来15年間の長い間、日本軍は中国国内を荒らし回って千万人という中国人を殺傷しているのだから、どんな巨額の賠償を要求されるか」と心配していたということもあり、湯司令や胡主任の話を聞き「本当に有難いと思った」ようである。そして岡崎は「その要請通りに、きれいに全財産を中国の正統政府に渡すよう心に誓った」と述懐する[111]。

だが、「老上海の中にはこのやり方を、中国を知らぬ拙い方法だとして、あざ笑う者もいた」ようである。彼ら老上海の一部からすれば、「貴金属や貴重品は親しい中国の友人に預けておけば、国交回復の暁には返してもらえる」と考えられるため「馬鹿正直に中国政府に引き渡すことはない」という思いが当然あるため、なかなか承知できない。それでも岡崎は、「今度の敗戦は過去幾度の事変とは、性質が違う」ということから、こうした一部の老上海たちを説得して、「どうにか納得を得た」ようである。

接収の方法は、「引渡し財産の調査表3通を作成して産業処理局に提出し、それによって現物と引き合わせながら接収を受ける」ということにしたようである。これは、「調査表1通は中国側に渡し、1通は財産の現所有者に、1通は大使館事務所に被接収の証拠として保有する」、というものであった[112]。

翌年（1946 年）4 月 23 日、上海での敗戦処理事務を終えた岡崎は、上海港を出港した。そして、日本に帰国した岡崎は、8 月 17 日、内閣より上海大使館事務参事官を依願免職された。

岡崎は、こうした上海での敗戦処理の事務仕事を、「上海での敗戦処理には苦労した」と振り返る。

また 1972 年 11 月 24 日に社団法人内外情勢調査会が主催した講演「これからの日中問題」のなかで、岡崎は湯恩伯について「湯恩伯将軍というのは、日本の士官学校を出た人で、また非常に親日的な人だったのでたいへん幸いしました。…湯恩伯さんは…いろいろ日本の居留民の引き上げに協力をしてくれた人であります。その後国民政府とともに台湾に落ち、台湾に落ちてから 3 度ばかり日本に参り、とうとう日本で亡くなったのです」と述懐している（『岡崎嘉平太　講演集３』記念会館、平成 18 年、35 頁）。

ところで当時の上海日本大使館では（先述した）中華民国の元国家元首、蒋介石の「徳を以て怨に報ゆる」（“以徳報怨”）演説の原案を書いた人物が、一高時代に岡崎と親交を深めたものの「日本を怨んで」中国に帰った反日的人物、龔徳柏（1 章 §3 参照）だという噂が流布していたようである。その話は岡崎にとって「予想外の出来事」であった。こうした「予想外の出来事」を野村耕作は『岡崎嘉平太論』のなかで「（1 章 §3 で考察した反日的人物）龔徳柏が敗戦のときにきわめて重要な役割を果たすのだから歴史というものはおもしろい」と評している（野村『岡崎嘉平太論』83 頁）。まさに野村の評するとおりである。

岡崎はこうした「予想外の出来事」に関してつぎのように述懐している。

日本の敗戦のとき出された“以徳報怨”という蒋介石主席の布告は

日本人誰でも感激しているものであるが、この原案は龔徳柏という者が書いたのだ「…」という噂が、当時上海の大使館事務所に勤めていた私の耳に入った。…龔徳柏という名前は確かである。龔徳柏といえば、あの一高の時の彼ではないか、と私は耳を疑うような気持ちで30年前、一高の校庭での別れを思い出した。

彼なのか？日本を怨み、怒って日本を去った彼、龔君があの布告の原案を書いたのか、と幾度も繰り返して口の奥で彼の名を呼び、眼の裏に彼の姿を浮かべたのである。（岡崎『私の記録』12頁）

日本が今度の戦争に負けたときに、蒋介石の布告というのが出たんです。その布告にね、「怨みに報いるに徳を以てせよ」という言葉が入っているんです。…私は上海で敗戦事務をやっている頃ですから、その言葉を新聞で読んだときには本当に有難いなと思ったですよ。ところが、この蒋介石の原文は龔徳柏という人物が書いたんだということが伝わって来たんですよ。もし僕の友人である龔徳柏が書いたのなら、本当に感謝しなければならない。

敗戦後、湯恩伯…将軍が接収に来た…とき総務主任をやってた胡という少将がいたんですが、……私は彼らにしょっちゅう会っていた。それで、龔徳柏に岡崎を知っているかどうか、東京に来ていたことがあるかどうか照会して貰ったんです。

そうしたら…それは僕が知ってる龔徳柏だったんです。

（『岡崎嘉平太伝』215-216頁）

岡崎は、こうした「予想外の出来事」をきっかけに龔徳柏が南京にいることを知り、南京にいる龔徳柏との再会を試みた。だが結局、岡崎が南京

にいる龔德柏に面会したいと連絡を取ったものの、岡崎が上海で敗戦処理の事務仕事に追われていたため、30 年ぶりの再会は果たせなかった[113]。

今号で扱うのは以上 3 章までである。次号では公職追放後の経済人としての企業再生の功績（4 章）、美土路昌一らとともに ANA（全日空）の前身会社を設立した話や ANA（全日空）社長時代の功績（5 章）、「岡崎嘉平太と中国」をテーマに岡崎の日中 LT 貿易締結交渉の功績（6 章）、を扱う予定である。

おことわり

本稿は修士論文「岡崎嘉平太とその時代―― 日中友好に尽くした ANA（全日空）社長の肖像――」の前半部分を修正・加筆したものである。なお、企業名や団体名等については原則として修士論文執筆当時のものである。

本稿では ANA（全日空）社長という立場の経済人でありながら日中友好に尽くした岡崎嘉平太氏が“戦前までに何をしていたか”までを原則として扱うこととし、戦後の企業再生や全日空の経営・日中友好に尽くしたことなどについては次号以降の別の機会に扱うこととしたい。なお、権利の都合で修士論文に添付した資料の一部は使用していない。

原文より引用した個所において今日では差別を助長する恐れがある表現が含まれるが、原文尊重の観点からあえてそのまま引用した。

謝辞

岡崎嘉平太氏に関する研究及び修士論文の執筆は、2012 年度学習院大学大学院政治学研究科競争的助成金、2013 年度学習院大学大学政治学研究科競争的助成金、および、平成 25 年度　学習院大学学業優秀者給付奨学金（一部）、などが使われました。こうした奨学金や助成金等の研究支援があったからこそ、岡山県吉備中央町にある岡崎嘉平太記念館や故・岡崎嘉平太氏所縁の地を訪れることが出来ました。

また、修士論文執筆当時多大なご協力をいただきました北村雅俊様（ANA 資料管理所）、櫻井友美様（岡崎嘉平太記念館：学芸員）、平野浩教授（「池貝」関連の資料提供）、安田英祥様、栗原麗羅氏（上智大学大学院博士後期課程）、をはじめとする

お世話になった皆様と指導教員の中田喜万教授に心より感謝いたします（肩書は当時）。

今回の紀要の寄稿にあたり資料提供・掲載許可を頂いた公益財団法人岡山県郷土文化財団様、全日本空輸株式会社（ANA）様、日本銀行情報サービス局様及びご対応いただいた初岡綾子様（岡崎嘉平太記念館）、遠山様（ANA SKY WEB ご意見・ご要望デスク）、水野玲子様（日本銀行情報サービス局）に心から御礼申しあげます。

【註】

1　ANA50 周年社史編集委員会編『大空への挑戦――ANA50 周年の航跡』全日本空輸、2004 年、131-132 頁。なお、厳密には天安門事件のさいに邦人救援機として活躍したジャンボ機はボーイング 747SR および B747LR である。

2　岡崎嘉平太記念館編『岡崎嘉平太記念館　特別講演会　日中友好のかけ橋　岡崎嘉平太―NHK スペシャル制作について聞く―』岡崎嘉平太記念館、2008 年、23 頁。

3　前掲『大空への挑戦』99 頁。

4　吉備人出版編集部編『新版　岡山文化観光検定試験　公式参考　書要点整理』吉備人出版、2007 年、44 頁。

5　『岡崎嘉平太伝』ぎょうせい、平成 4 年、37 頁。

6　同書、46 頁。

7　同書、48 頁。

8　同上。

9　同書、39 頁。引用箇所括弧内筆者加筆。

10　同書、39-40 頁。

11　同書、40 頁。

12　同書、57 頁。

13　『岡崎嘉平太講演集 1』71 頁。

14　同上。

15　岡崎が入学した 1919 年当時の東京帝国大学法学部長はのちに貴族院議員や東京帝国大学総長を歴任した小野塚喜平次。

16　同上。

17　同書、77 頁。

18　2011 年 4 月から同年 6 月まで、フジテレビほかにて放送されたテレビアニメ。

19　公益財団法人精義塾は、岡山県出身の学生または岡山県に縁故のある学生のための寮として、1893 年に設立された学生寮である。所在地は東京都文京区小日向 1 丁目 21-13。

20　『岡崎嘉平太伝』101 頁。

21　同上。

22　同上。

23　同上。

24　同書、122 頁。

25　もちろん、多くの知識や教養を身に付けるような“伝聞学問”による“学び”も重要であり、必ずしも、こうした“学び”のスタイルを批判したり否定したりすることを意図しているわけではない。

26　ライヒスバンク（Reichsbank）は、1876 年から 1948 年まで存在した「ドイツ帝国の中央銀行（Zentralnotenbank des Deutschen Reiches）」のことである。

27　『岡崎嘉平太伝』、124 頁。

28　同書、127 頁。

29　同上。

30　同書、128-129 頁。

31　メクレンブルク＝フォアポンメルン州（Land Mecklenburg-Vorpommern）にある島。

32　同書、130 頁。

33　同書、131 頁。

34　「第三帝国」総統に就任したヒットラーの最終的な目標は、松岡完が述べるように、「ヴェルサイユ体制の打破と、優秀民族であるドイツ人の生存圏（レーベンスラウム）の獲得にあった。つまり、圧倒的な軍事力を用いてヨーロッパ、特にソ連を征服し、各国の労働力・資源・海外植民地を入手、ひいては世界帝国を建国することである」。ヒットラーはその目標のために「ドイツ人共通の敵としてロシア人やフランス人への蔑視と敵意をあおりユダヤ人を迫害するなど、人種主義的な扇動によって国粋主義を刺激し、積極的に対外膨張を求めた」（松岡『20 世紀の国際政治』同文館出版、第 5 版、2007 年、29 頁）。

35　なかでも、ポーランド・アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所での悲劇に代表されるように、ナチス政権下のドイツおよびナチス支配下にあるドイツ周辺国では、ナチスのユダヤ人迫害によって多くのユダヤ人の命が奪われた。こうしたナチス・ドイツによるユダヤ人迫害にたいして「私が私として生きることを、

許して欲しい」という思いを日記に書き残したユダヤ系ドイツ人少女アンネ・フランクは、ナチスの迫害を受けるなかでもなお、生きる希望を持ち続けていた。こうしたナチスによる迫害を受けたユダヤ人はアンネばかりではなかった。今日、ヨーロッパを代表する強豪サッカークラブのひとつとして知られる FC バイエルン・ミュンヘンが 1932 年にはじめてドイツ王者になったときの社長のクルト・ランダウアー（Kurt Landauer）もコーチのリヒャルト・ドンビ（Richard Dombi）もともにユダヤ人であった。ランダウアーは、ナチスの力が台頭すると、1933 年 3 月 22 日、FC バイエルン・ミュンヘンの職を辞任した。しかし、その後ユダヤ人であったランダウアーは、1938 年 11 月 10 日にナチスによって逮捕され、ダッハウ強制収容所（Konzentrationslager Dachau：ドイツ・バイエルン州ダッハウに存在したナチスによる強制収容所）に収監された。だが、ランダウアーは幸いなことに、第 1 次世界大戦の兵士であったことを理由に、逮捕 33 日後にダッハウ強制収容所から出ることを許された。ランダウアーはそれから数か月後の 1939 年 3 月 15 日にスイスに移住した。不幸なことにランダウアーのほとんどすべての兄弟はその後、ナチスによって殺害された（FC バイエルン・ミュンヘン社長を歴任したユダヤ人のランダウアーに関する詳細は、ドイツ語文献、Dietrich Schulze-Marmeling “Der FC Bayern und seine Juden: Aufstieg und Zerschlagung einer liberalen Fußballkultur”（Verlag Die Werkstatt GmbH, Auflage, 2011.）を参照のこと）。

36　ベネディクト・アンダーソン『増補 想像の共同体――ナショナリズムの起源と流行』白石隆・白石さや訳、NTT 出版、2007 年、188 頁。

37　ミヒャエル・ヤイスマン『国民とその敵』山川出版、2007 年、12-13 頁。

38　「“ ゲゼールシャフト（Gesellschaft）” と “ ゲマインシャフト（Gemeinschaft）” の政治的統合」という表現は、「国家」と「国民」の政治的統合、「想像の共同体」と「社会」の政治的統合、「実在社会」と「政治的国家（国家という非実在概念）」との政治的統合、などと置き換えて表現してもよいだろう。

39　ミヒャエル・ヤイスマン、前掲、135 頁。

40　本研究で参照したドイツ語版の『マインカンプ（わが闘争）』は Adolf Hitler “Mein Kampf” Elite Minds Inc, 2010 である。

41　『岡崎嘉平太伝』135-136 頁。

42　同書、136 頁。

43　同書、136 頁。

44　坂井隆治によって訳された『マインカンプ』は 1932 年に『余の闘争：ドイツ

国民社会主義運動』という邦題にて出版されている。

45　井上寿一『危機のなかの協調外交――日中戦争に至る対外政策の形成と展開』山川出版社、1994年、309頁。括弧内筆者加筆。

46　同書、136 頁。

47　同書、160-161 頁。

48　同書、456-457 頁。

49　『岡崎嘉平太伝』141 頁。

50　井上寿一『政友会と民政党―戦前の二大政党制に何を学ぶか―』中公新書、2012 年、140 頁。

51　井上寿一『戦前日本のグローバリズム』新潮選書、2011 年、86 頁。

52　同書、88 頁。

53　井上寿一『日中戦争下の日本』講談社選書メチエ、2007 年、13 頁。

54　『岡崎嘉平太伝』、159-161 頁。

55　同書、153 頁。

56　同書、154 頁。

57　同書、155 頁。

58　同書、155-156 頁。

59　同書、156 頁。

60　同上。

61　『ANA グループ機内誌　翼の王国』ANA、2006 年 2 月号（No.440）、143 頁。

62　『岡崎嘉平太伝』464-465 頁。

63　井上寿一『日中戦争下の日本』講談社選書メチエ、2007 年、14 頁。

64　『岡崎嘉平太伝』460 頁。

65　同上。

66　多田井喜生編『続・現代史資料（11）占領地通貨政策』みすず書房、1983 年、221-222 頁。なお、この「華興商業銀行設立要領」のなかで、名称を「華興商業銀行 Hua Hsing Commercial Bank ト称シ維新政府法人トス」こと、所在地は「本店ヲ上海ニ置キ、支店ヲ中支那ノ必要ナル地ニ置ク」こと、資本金は 85 千万円全額支払込とすること、などが定められた（以上、出典は同所）。

67　同書、228 頁。

68　『岡崎嘉平太伝』179 頁、および、多田井喜生編『続・現代史資料（11）占領地通貨政策』みすず書房、1983 年、221-222 頁。

69　『岡崎嘉平太伝』179 頁。

70　同上。
71　同上、括弧内筆者加筆。
72　同書、460 頁。
73　同上。
74　同書 461 頁。
75　同書、169 頁。
76　同書、169-171 頁。
77　同書、170 頁。
78　同書、171 頁。
79　同上。
80　大東亜省は、昭和 17 年 9 月 11 日に、以下に記す、「大東亜省官制要綱」が閣議決定されたことに基づいて、同年 11 月 1 日付で大東亜省官制が交付されたことにより設置された。（外務省百年史編纂委員会編『外務省の百年』下巻、原書房、1969 年、726-729 頁）
81　『岡崎嘉平太伝』461 頁、『講演集 1』82 頁。
82　『岡崎嘉平太伝』462 頁。
83　同書、187 頁。
84　岡崎嘉平太『私の記録』78 頁。
85　『岡崎嘉平太伝』315-316 頁。
86　同書、189 頁、461 頁。
87　同書、191 頁。
88　岡崎嘉平太『私の記録』、93 頁。
89　『岡崎嘉平太伝』198 頁。
90　同上。
91　内山完造『そんへえ・おおへえ』岩波書店、昭和 25 年、13 頁。同所において、内山は、内山自身が「キリスト教信者」であったことを述べている。
92　南京でも大使館と、総軍との連絡会議があり、軍からは参謀副長、大使館からは公司あるいは参事官、そして岡崎も上海から出席していた。（岡崎嘉平太『私の記録』53 頁。）
93　岡崎嘉平太『私の記録』53-54 頁。
94　同書、54 頁。
95　同書、54-55 頁。
96　同書、55-56 頁。

97　同書、56 頁。
98　同書、56 頁。
99　同書、57 頁。
100 同書、57-58 頁。
101 高綱博文『「国際都市」のなかの日本人』研文出版、2009 年、286-287 頁。
102 岡崎嘉平太『私の記録』63 頁。
103 同書、63 頁。
104 同書、64 頁。
105 同書、20-21 頁。
106 同書、21 頁。
107 同書、22 頁。
108 同書、22 頁。
109 同書、22-23 頁。
110 同書、23 頁。
111 同書、65 頁。
112 同上。
113 なお、龔徳柏はその後、台湾（臺灣）に移住し、1972 年 4 月 2 日付で台北市から岡崎嘉平太宛の書簡を送っている

【参考文献】

（岡崎嘉平太）
岡崎嘉平太伝刊行会編『岡崎嘉平太伝』ぎょうせい、1992 年。
岡崎嘉平太『私の記録――飛雪、春の到るを迎う』東方選書、1979 年。
岡崎嘉平太「私の履歴書」『私の履歴書――経済人』第10巻、日本経済新聞社、1980 年。
岡崎嘉平太『終わりなき日中の旅』原書房、1984 年。
岡崎嘉平太・伊藤武雄・松本重治『われらの生涯のなかの中国』みすず書房、1983 年。
岡崎嘉平太『私は思う――日本の課題』読売新聞社、1972 年。
岡崎嘉平太『これからの日中問題』内外情勢調査会、1972 年。
岡崎嘉平太『中国問題への道』春秋社、1971 年。
岡崎嘉平太『たてのいとよこの糸』貯蓄増強中央委員会、1970 年。
岡崎嘉平太『わが道』全日空社長室、1966 年。

（岩波書店『世界』）
岡崎嘉平太「怨は怨によっては息まず」1982 年 10 月号、42-45 頁。
岡崎嘉平太「得隴望蜀」1978 年 10 月号、174-175 頁。
岡崎嘉平太「周恩来総理の思い出　補遺」1976 年 4 月号、179 頁。
岡崎嘉平太「周恩来総理の思い出」1976 年 3 月号、164-168 頁。
岡崎嘉平太「外交と道義――「日中正常化」後を考える」1973 年 1 月号、96-99 頁。
岡崎嘉平太「根本を誤ってはならない――新政権の課題と日中講和の道」1972 年 8 月号、44-49 頁。
岡崎嘉平太「歴史に逆らう中国政策」1971 年 11 月号、149-150 頁。
岡崎嘉平太「何が過っていたか　何が正しいか」1971 年 9 月号、64-66 頁。
岡崎嘉平太「障害と展望と確信と――日中覚書貿易交渉を終えて」1971 年 5 月号、52-58 頁。
岡崎嘉平太「覚書貿易の期限切れを前にして思う」1971 年 1 月号、205-210 頁。
岡崎嘉平太「日中関係の将来と吉田書簡――日本と中国」1966 年 11 月号、174-176 頁。
（日本航空協会『航空と文化』）
岡崎嘉平太「日中友好について」1986 年 1 月号（No.19）、52-54 頁。
（『中央公論』）
岡崎嘉平太「中国に賭けたわが半生の記」1972 年 10 月号、92-101 頁。
（岡崎嘉平太記念館）
記念館編『講演集』紀要第 1-3 号、2004-2006 年。
記念館編『岡崎嘉平太記念館だより』VOL.1、2004 年 7 月。
記念館編『岡崎嘉平太がめざした世界平和を考える』第 2-11 回講演会、2004-12 年。
記念館編『岡崎嘉平太記念館特別講演　日中友好の架け橋　岡崎嘉平太』、2007 年。
（岡崎嘉平太論）
阿部康男「岡崎嘉平太――独立独歩、信念の人」20 世紀の航空人（9）、日本航空協会編『航空と文化』2002 年夏季号（No.79）、13-17 頁。
岡田晴彦『絆の翼 ――チームだから強い、ANA のスゴさの秘密 』ダイヤモンド社、2007 年、8 章「周総理的老朋友　岡崎嘉平太訪華団（周恩来首相の古い友人、岡崎嘉平太先生訪中団）――第二代社長が遺したもうひとつの DNA」199-216 頁。
野村耕作『岡崎嘉平太論』現代人物論全集第 3 巻、ライフ社、1978 年。
（日本銀行）

日本銀行編『日本銀行ガイドブック if』日本銀行、1996 年。
日本銀行情報サービス局編『おしえて！日本銀行――日本銀行ガイドブック』日本銀行情報サービス局、2013 年。
日本銀行金融研究所編『日本銀行の機能と業務』有斐閣、2011 年。
日本銀行百年史編纂委員会編『日本銀行百年史――資料編』日本銀行、1986 年。
日本銀行百年史編纂委員会編『日本銀行職場百年』上下巻、日本銀行、1982 年。
（資料）
ANA（全日本空輸）社史『大空へ 10 年』昭和 37 年、『大空へ 20 年』昭和 47 年、『限りなく大空へ――全日空の 30 年』1973 年、『大空への挑戦――ANA50 周年の航跡』2004 年。
※ ANA（全日空）に関する社史や資料・文献等の詳細については次号参照。
朝日新聞社百年史編修委員会編『朝日新聞社史――資料編』朝日新聞社、1995 年。
公益法人三笠保存会編『記念艦「三笠」――Memorial Ship Mikasa』三笠保存会。
※ ANA（全日空）関連（美土路昌一関連や日ペリ時代を含む）・コスモ石油（丸善石油）関連・（株）池貝関連・航空関連・日中 LT 貿易関連（周恩来関連を含む）については次号で記す。
（日本語文献）※ 1 章～ 3 章まで。主要文献のみ。
天児慧『中華人民共和国史　新版』岩波新書、2013 年 8 月。
天児慧『日中対立――習近平政権の中国をよむ』ちくま新書、2013 年 6 月。
天児慧、加藤千洋『中国大陸をゆく――近代化の素顔』岩波書店、1990 年。
依田憙家編『日中戦争占領地区支配資料』龍渓書舎、1987 年。
井上寿一『戦前日本のグローバリズム』新潮選書、2011 年。
井上寿一『戦前昭和の社会――1926-1945』講談社現代新書、2011 年。
井上寿一『日中戦争下の日本』講談社選書メチエ、2007 年。
井上寿一『危機のなかの協調外交――日中戦争に至る対外政策の形成と展開――』山川出版社、1994 年。
内山完造『魯迅の思い出』社会思想社、1979 年。
内山完造『中国人の生活風景』東方書店、1979 年。
内山完造『そんへえ・おおへえ』岩波書店、1950 年。
大貫恵美子『学徒兵の精神誌――「与えられた死」と「生」の探求』岩波書店、2006 年。
大橋洋治「アジアの空をつなぐ」日中国交正常化 40 周年記念日中関係アーカイブシリーズ日中関係その時と私（3）『日中経協ジャーナル』2012 年 6 月号、30-33 頁。

小熊英二『単一民族神話の起源――＜日本人＞の自画像の系譜』新曜社、1995 年。
外務省百年史編纂委員会編『外務省の百年』下巻、原書房、1969 年。
川北隆雄『日本銀行――何が問われているのか』岩波新書、1995 年。
佐々木毅『学ぶとはどういうことか』講談社、2012 年。
塩川伸明『民族とネイション』岩波新書、2009 年。
島平和研究所編『日本外交主要文書・年表――1961-1970 年』第 2 巻、原書房、1984 年。
高綱博文『「国際都市」のなかの日本人』研文出版、2009 年。
高綱博文編『戦時上海――1937-45 年』研文出版、2005 年。
高晃公『魯迅の政治思想――西洋政治哲学の東漸と中国知識人』日本経済評論社、2007 年。
竹中千春『世界はなぜ仲良くできないの？』東急コミュニケーションズ、2004 年。
多田井喜生編『続・現代史資料（11）占領地通貨政策』みすず書房、1983 年。
通産大臣官房調査課編『戦後経済 10 年史』商工会館出版部、1954 年。
ドイツの事情研究会訳『ドイツの実情』ドイツ連邦共和国外務省文化広報部、2010 年。
湯恩伯記念会編『湯恩伯将軍――日本の友』湯恩伯記念会、1954 年。
内閣制度百年史編纂委員会編『内閣制度百年史』下巻、大蔵省（現、財務省）出版局、1985 年。
中居良文編『台頭中国の対外関係』御茶の水書房、2009 年。
日本経済新聞社編『私の履歴書』第 20 巻、日本経済新聞社、1986 年。
古田和子『上海ネットワークと近代東アジア』東京大学出版会、2000 年。
古厩忠夫『日中戦争と上海、そして私――古厩忠夫中国近現代論集』研文出版、2004 年。
古厩忠夫『裏日本―近代日本を問いなおす―』岩波新書、1997 年。
松岡完『改訂増補版　20 世紀の国際政治』同文館出版、第 5 版、2007 年。
山田風太郎『新装版　戦中派不戦日記』講談社文庫、2002 年。
吉野源三郎「人間への信頼」鶴見俊輔編『戦後日本思想大系』第 4 巻、筑摩書房、1968 年。
鹿雪瑩『古井喜実と中国―日中国交正常化への道―』思文閣出版、2011 年。
（外国語文献・訳著等）※ 1 章～ 3 章まで。
クラウス・ヒルデブラント『ヒトラーと第三帝国』中井晶夫・義井博訳、南窓社、1987 年。

ジョージ・オーウェル『オーウェル評論集』小野寺健訳、岩波文庫、1982 年。
ジョン・ダワー『【増補版】敗北を抱きしめて』上下巻、岩波書店、2004 年。
ハラルト・シュテファン『ヒトラーという男』滝田毅訳、講談社、1999 年。
ミヒャエル・ヤイスマン『国民とその敵』山川出版、2007 年。
Adolf Hitler “Mein Kampf”, California, Elite Minds Inc, 2010.（【訳著】アドルフ・ヒトラー『わが闘争―Ⅰ民族主義的世界観―』上下巻、平野一郎、将積茂訳、角川文庫、1973 年。アドルフ・ヒットラー『続・わが闘争 生存圏と領土問題』平野一郎訳、角川文庫、2004 年。）
Benedict Anderson “Imagined Communities: A Brilliant Exegesis on Nationalism” New Edition, London and New York, Verso, 2006.（【訳著】ベネディクト・アンダーソン『増補 想像の共同体―ナショナリズムの起源と流行』白石隆・白石さや訳、書籍工房葉山、2007 年。）
Betty Peh-T'i Wei ”Old Shanghai: Images of Asia”, Oxford, Oxford University Press, 1993.
Dietrich Schulze-Marmeling “Der FC Bayern und seine Juden: Aufstieg und Zerschlagung einer liberalen Fußballkultur”, Göttingen, Verlag Die Werkstatt GmbH, Auflage, 2011.
Joachim Fest “Der Untergang: Hitler und das Ende des Dritten Reiches. Eine historische Skizze”, Berlin, Alexander Fest Verlag, 2002.（【訳著】ヨアヒム・フェスト『ヒットラー最期の 12 日間』鈴木直訳、岩波書店、2005 年。）
怀念周恩来編辑組編『怀念周恩来』北京（Beijing）、人民出版社、1986 年。
高綱博文・陳祖恩編『日本僑民在上海』上海（Shanghai）、上海辞書出版社、2000 年。
湯志均編『近代上海大事記』上海（Shanghai）、上海辞書出版社、1989 年。
龔徳柏『龔徳柏回憶録』上中下巻、臺灣（臺北：Taipei）、龍文出版社、1989 年。
※周恩来や航空（航空事故を含む）に関する英語文献は次号で記す。